



クロスプレイ

H I G A S H I M A T S U Y A M A

クロスプレイ

東松山

報告書

2022 / 2023

ケアとアートが
交差する場で
起きていること



クロスプレイ

HIGASHIMATSUYAMA

はじめに

「アーティストが高齢者福祉施設に滞在するとは、いったいどういうことなのか？」

多くの方がクロスプレイ東松山の取り組みを聞いたときに、まず頭によぎる素朴な疑問ではないでしょうか？

埼玉県東松山市にある、医療法人社団保順会は、「3つのC～Cure（治療）・Care（介護・福祉）・Culture（文化）～」を理念に掲げ、生きていく中で病気や障害に直面したり、介護が必要になったりしても「その人らしい暮らし」を支えるために、その方の生きてきた文化的背景も大切に作る全人的ケアの実現を目指しています。

2022年、保順会が運営する「デイサービス楽らく」に、通常の通所介護機能と併設して、アーティスト・イン・レジデンスが可能となるスペースを設け、埼玉県内に事務所を構えるアートマネジメントの専門集団である一般社団法人ベンチの共同主催で「クロスプレイ東松山」を立ち上げました。

「クロスプレイ東松山」では、年間を通じて様々なアーティストに施設に滞在してもらい、作品創作や文化的活動などを通して、利用者やスタッフと交流しています。

本報告書は、立ち上げの2022年度から2023年度の活動を振り返り、活動評価も交えて、「アーティストが高齢者福祉施設に滞在する」ということがケアの現場でどういう関係性を育み、ケアとアートが交差する場でどのようなことが起きているのか。今後の課題も含めて考察する一冊となっております。本書を通じて、事例の共有と議論の一助となれば幸いです。

最後になりますが、本プロジェクトに携わって下さったアーティストの皆様、スタッフの皆様、そして2022年度よりご支援いただいております公益財団法人福武財団様、2023年度「第1回未来の介護基金」によって助成いただきました公益財団法人日本フィランソロピック財団様、関係各位にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

医療法人社団保順会
一般社団法人ベンチ

目次

- 01 はじめに
- 03 クロスプレイ東松山とは
- 04 デイサービス楽らくの1日
- 05 クロスプレイ東松山年表 2019-2024

活動紹介 | アソシエイトアーティスト

- 06 白神ももこ
- 10 アサダワタル
- 14 吉田幸平 / 吉田和古

活動紹介 | 公募アーティスト

- 18 松橋和也
- 19 安村卓士
- 20 桂融
- 21 仁禮洋志
- 22 浅川奏瑛
- 23 竹中香子
- 24 青木麦生
- 25 野村真人
- 26 荻原雄太

- 27 アソシエイトアーティスト振り返りトーク
- 29 クロストーク「介護の現場で生まれる、文化的な出来事たち」
- 31 「クロスプレイ東松山の活動評価から見えてきたもの」長津結一郎
- 32 クロスプレイ東松山の活動評価
- 34 デイサービス楽らく職員座談会「介護の現場にアーティストが入ること」
- 37 事務局振り返り「ケアとアートがクロスする場で何が起きたのか」
- 40 奥付



クロスプレイ東松山とは

デイサービス楽らくについて

埼玉県東松山市にある高齢者福祉施設。市内で辻保順医院を経営する医療法人社団保順会が2007年に開所した。「らくに たのしく その人らしく」をモットーに、年齢を重ねることで生じる病気や障害等により介護や手助けが必要になっても、住み慣れた地域での暮らしを豊かにし続ける場として、専門性のあるスタッフが“寄り添うケア”を大切にサービスが続いている。当初は市内の上唐子地区にあったが、建物の契約満了に合わせて、近隣の下唐子地区に新たな施設を建築し、移転することが決定。新施設を設計する際に、高齢者福祉施設が文化施設の機能と役割も持つというコンセプトのもと、アーティストが宿泊できるレジデンススペースと、創作活動を行うことができる多目的室を設置する。こうして2022年6月に新たな「デイサービス楽らく」が誕生した。定員30名の施設では、曜日によって異なる高齢者が利用し、日中の活動の時間を送っている。

デイサービス(通所介護)とは
利用者が施設に通い、食事や入浴・機能訓練・レクリエーションなどの介護を受けられるサービス。介護保険法に基づき、要介護・要支援の認定を受けた人が利用可能。短期入所(ショートステイ)等の宿泊を伴うサービスを提供する施設もあるが、デイサービス楽らくでは、ショートステイは行っていない。このためアーティストには、利用者や職員が帰った後、一人で施設に宿泊して過ごす時間が生まれる。

アーティストの関わり方

①アソシエイトアーティスト

クロスプレイ東松山事務局からアーティストに依頼し、滞在・交流しながら、施設内や外部の場所等で作品制作や上演・展示等のアウトプットを目指す。

クロスプレイ東松山について

デイサービス楽らくの移転新築を機に、医療法人社団保順会、一般社団法人ベンチが共同で始めた文化事業。アーティストがデイサービス楽らくに宿泊滞在して利用者や職員、地域住民と文化的な交流を行う「アーティスト・イン・レジデンス」プログラムを軸に展開。また、東松山市民文化センター、東松山市立唐子小学校、原爆の図丸木美術館、comeya gallery等、東松山市内の文化・教育施設とも連携して、アーティストの活動を通じた交流に取り組んでいる。長期的には取り組みを通じて、地域にある様々な文化・福祉・教育施設等が「小さなアートセンター」のような場所となり、住民の暮らしに多様な文化が根付き、その人らしく生きていくことができる地域づくりを目指す。

アーティスト・イン・レジデンス(略称:AIR)とは
アーティストが一定期間ある土地に滞在し、常時とは異なる文化環境で作品制作やリサーチ活動を行うこと。またはアーティストの滞在制作を支援する事業のこと。近年では日本のみならず世界各地で多様なAIRが行われているが、常設のAIR機能をもつ高齢者福祉施設を設計し運営する試みは、世界的に見ても非常に珍しい事例だ。

②公募アーティスト

滞在を希望するアーティストを公募し、レジデンススペースを提供するプログラム。アーティストはレジデントルームや多目的室を自由に活用して、関心のある活動を行い、同時に利用者や職員との交流につながる活動も提案・実施する。

プロジェクトに関わる人たち

医療法人社団保順会 東松山市内で医院、通所介護事業、居宅介護支援事業を運営

通所介護事業所デイサービス楽らく

介護職員
看護師
理学療法士
相談員
送迎ドライバー

クロスプレイ東松山メンバー

施設長
(武田奈都子)

医療法人社団保順会と一般社団法人ベンチが協働し、さまざまなスキル・経験がある人たちが関わり合いながら、プロジェクトが動く。

一般社団法人ベンチ 埼玉県を拠点に福祉やまちづくり等、多様な分野と協働するアートマネージャーチーム

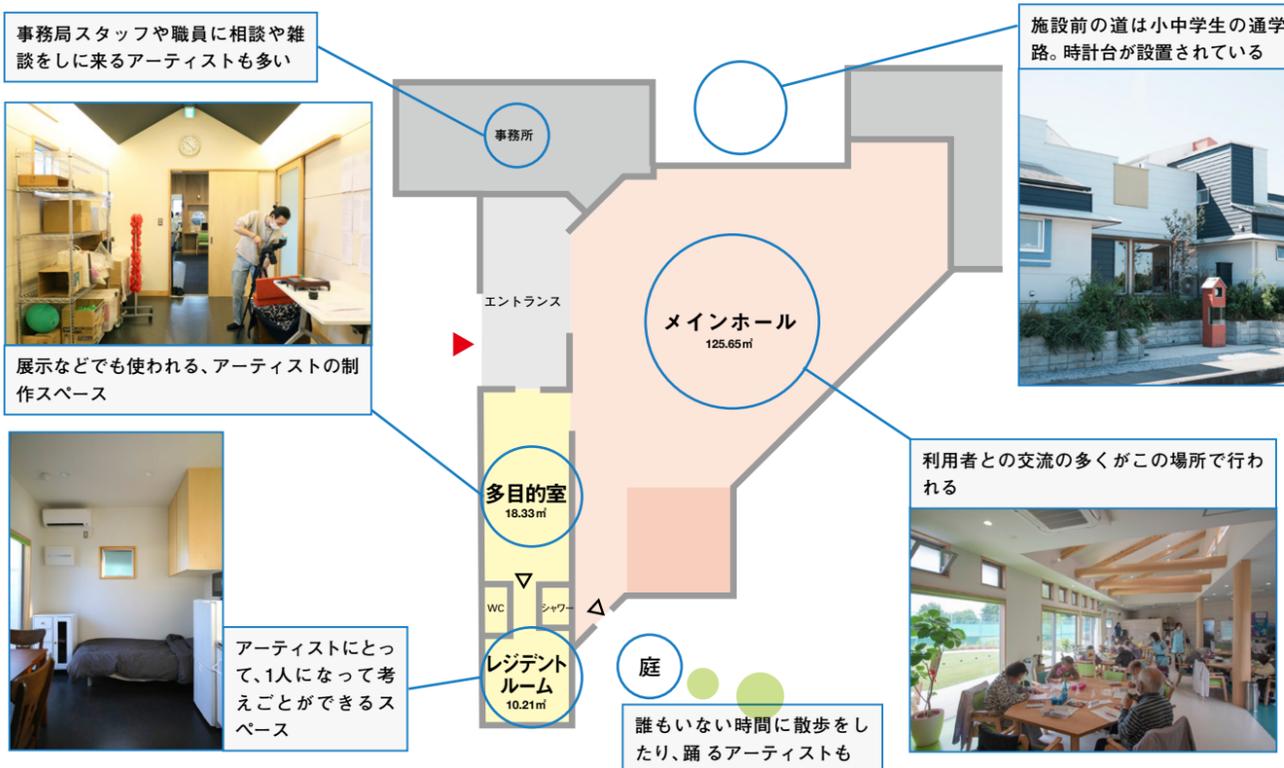
コーディネーター
(藤原顕太)

プロデューサー
(武田知也)

デイサービス楽らくの1日

	デイサービス利用者	職員	アーティスト		デイサービス利用者	職員	アーティスト
7:00		出勤、申し送り		13:00	口腔ケア、静養、テレビ鑑賞、庭のお散歩など		
8:00		送迎車出発	起床、朝食	14:00	レクリエーション		レクリエーションに参加、利用者向けプログラムの実施、制作、外出など
9:00	順次到着、水分補給、健康チェック、個別活動、個別機能訓練(リハビリテーション)*、入浴* ※午前中、順次実施		レジデントルームからホールへ、利用者や職員と挨拶、観察など	15:00	おやつ、水分補給		
10:00	朝の会		朝の会に参加、一緒に体操、利用者への個別リサーチなど	16:00	送迎車出発、帰宅	清掃、翌日の準備	送迎に同行、送迎待ちの利用者と交流など
11:00	レクリエーション、食事前嚥下体操			17:00		送迎車帰着、終礼、退勤	活動内容や利用者の様子を共有
12:00	昼食		利用者と一緒に昼食、あるいはレジデントルームで昼食	18:00以降			買い物、夕食、記録のまとめ、制作など(レジデントルームで1人過ごす)

※過ごし方はアーティストによって異なるので、ここに記載されていることは一例です



クロスプレイ東松山年表 2019-2024

●=アソシエイトアーティスト ●=公募アーティスト

2019	9月	デイサービス楽らく新築移転計画開始
2021	5月	デイサービス楽らくを運営する医療法人社団保順会とアートマネージャーのコレクティブである一般社団法人ベンチが協働し「クロスプレイ東松山」企画準備を開始
	8月	着工
2022	6月	デイサービス楽らく 新築移転
	7月	クロスプレイ東松山始動 ●白神ももこ滞在① ●アサダワタル滞在①
	8月	●白神ももこ滞在②
	9月	●アサダワタル滞在② 第1回『楽らくラジオ』
	10月	第1回公募アーティスト募集 ●吉田幸平・和古写真展『Love letter to... 私の記憶のたからもの』聞き書き開始 ●アサダワタル滞在③ 第2回『楽らくラジオ』 ●白神ももこ滞在③
	11月	●白神ももこ滞在④ ●アサダワタル滞在④ 第3回『楽らくラジオ』
	12月	●松橋和也滞在① ●白神ももこ滞在⑤『年末一芸発表会』開催
2023	1月	●白神ももこ滞在⑥ ●白神ももこ振付・演出『どこ吹く風のあなた、ここに吹く風のまにまに』 1/15 デイサービス楽らく公演、1/22 東松山市民文化センター公演 ●アサダワタル滞在⑤
	2月	●松橋和也滞在② ●吉田幸平・和古 2/6-16 写真展『Love letter to... 私の記憶のたからもの』@デイサービス楽らく
	3月	●安村卓士滞在 ●アサダワタル滞在⑥ ●吉田幸平・和古 3/4, 3/11 写真展『Love letter to... 私の記憶のたからもの』@comeya galally (東松山市)
	4月	NHK総合「ひるまほっと」でクロスプレイ東松山の活動が紹介される ●桂融滞在① ●アサダワタル滞在⑦ アサダワタル作詞・作曲 デイサービス楽らくオリジナル曲「また明日も楽らくで」『楽らく日和』が生まれる
	5月	●アサダワタル滞在⑧ ●桂融滞在②
	6月	第2回公募アーティスト募集
	8月	クロスプレイ東松山有償インターン募集 ●アサダワタル滞在⑨
	9月	●アサダワタル滞在⑩ アサダワタルプロジェクト『また明日も歌ったような』唐子小学校4年生と交流「また明日も楽らくで」を利用者と共に歌う
	10月	●アサダワタル滞在⑪ アサダワタルプロジェクト『また明日も歌ったような』唐子小学校4年生児童有志と利用者による「また明日も楽らくで」レコーディング、ミュージックビデオ撮影 ●仁禮洋志滞在
	11月	日本科学未来館の常設展「古いパーク」でクロスプレイ東松山のインタビュー映像が展示される ●浅川奏瑛滞在①
	12月	●アサダワタル滞在⑫ ●竹中香子滞在① ●青木麦生滞在①
2024	1月	●竹中香子滞在② ●青木麦生滞在② ●浅川奏瑛滞在②
	2月	●アサダワタル 2/11 アサダワタルプロジェクト『また明日も歌ったような』ミュージックビデオ完成披露上映+トークイベント@デイサービス楽らく ●青木麦生滞在③
	3月	●野村真人滞在 ●アサダワタル 3/28 アサダワタルプロジェクト『また明日も歌ったような』時計台での曲のお披露目

活動紹介 | アソシエイトアーティスト

滞在期間
2022年7月7日～9日、8月17日、
10月18日～19日、10月25日～28日、
11月2日～4日、11月10日～15日、12月28日～29日
2023年1月6日～15日、1月17日～22日

しら
が
白
神
も
も
こ



©北川姉妹

振付家、演出家、ダンサー。身近な日々のささいなできごとや願望などから着想を得たダンスを用いた作品創作を続けているダンス・パフォーマンス的グループ「モモンガ・コンプレックス」を主宰。全作品の構成・振付・演出を担当している。2020年、フェスティバル/トーキョー20にてコロナ禍での作品としてミュージカルのダンス・パフォーマンス『わたしたちは、そろっている。』を上演。四国学院大学、桜美林大学非常勤講師。2017—2018年度セゾン文化財団ジュニアフェロー。2019年～、埼玉県富士見市民文化会館キラリふじみにて芸術監督を務める。

ただそこに居ることからの発見

白神ももさんは「クロスプレイ東松山」初の滞在アーティストとして、2022年7月から滞在を始めました。2～3日程度の滞在と1週間程度の滞在を断続的に繰り返し、その経験を元にした舞台公演を2023年1月に行うことだけが決まっていました。滞在当初、利用者が楽しめる取り組みを考え、適切にケアする介護職員の働きぶりを見て「振付とかダンサーの私は出る幕ないな」と思うほど圧倒された白神さん。そんな中、塗り絵や体操、七夕祭り・夏祭りなどのイベント＝「デイサービスの日常」に参加し、時には利用者と一緒に踊りながらも特別な役割はなく、ただそこに居続けることを日々試みました。ある日、1人の利用者に「あなた何してるの?」と聞かれ、「ウロウロしてます」と言うと、「あらそう、良かったわねえ」との答えが。その時白神さんは、何かの目的のためにそこに居るのではない、役に立つとか役割を担う形ではない存在に憧れを抱いていた、かつての自分を思い出したと言います。秋以降、白神さんは様々なことにトライしていきました。デイサービスの中庭で利用者からダンスを教わる、他の滞在アーティストの聞き書きに同席する、地域の人たち向けにダンスワークショップを行う、デイサービス内での運動会に参加するなど、多くの機会パフォーマンスへのヒントを探りました。そして生まれた舞台公演のタイトルが、『どこ吹く風のあなた、ここに吹く風のまにまに』です。「毎日が始まって終わる」デイサービスの日常の「劇場性」と、それを仕切る職員の即興性に「風」を感じた白神さんが、その感覚をもとに付けたタイトルです。

デイサービス楽らくの日常とつながった舞台を目指す

しかし、12月、舞台本番の1ヶ月前になっても、具体的なプランは立っていませんでした。デイサービスという特性上、利用者によって来所する曜日や頻度もバラバラで、動作や言葉を覚え、それを繰り返しリハーサルする通常の舞台の作り方も適いません。そこで白神さんは、自身が体験し過ぎてきたデイサービスの日常の「空気」や「風」をそのまま舞台に上げる方法はないかと考えます。そのヒントとなったのは、年末に行われている「カラオケ大会」。これを職員の協力を得て「一芸発表会」として設定し、白神さん構成・進行のもとで、利用者が好きな歌を歌ったり、得意な楽器を演奏したり、みんなで踊ったりする楽しい会＝「リハーサル」を行いました。この会を年末に終え、うっすらと方向性が見えた白神さんは、そこから舞台の構成・出演者を大急ぎで決定し、年始の1週間で出演者との個別リハーサルや打合せを経て、いよいよデイサービスでの公演本番へと向かったのです。



滞在初日は一緒にお菓子づくり



デイサービス楽らく公演の様子



ある日の昼休み、中庭で社交ダンスを教わる白神さん



「一芸発表会」では「きよしのズンドコ節」に合わせて炭焼節を踊った

白神ももこ振付・演出

『どこ吹く風のあなた、ここに吹く風のまにまに』

2023年1月15日 デイサービス楽らく

2023年1月22日 東松山市民文化センター

ひとつの舞台の興行等が終わる日を『楽日』と言うけれど、それはどうせ終わるのなら楽しく終わろうという願いからなのだろうか？
デイサービス楽らくの日々は、毎日が「始まって終わる」。支える人々の軽やかな足取りの中にはいつも疾風が吹いていて、ここに訪れる人々の日々重くなっていく身体のすき間や頭上にはいつもやわらかくふんわりと風がそよいでいて、それはそれは気まぐれで軽やかだ。

白神ももこ
(公演チラシより)



東松山市民文化センター公演の様子

2023年1月15日にデイサービス楽らく、1月22日に東松山市民文化センターホールの2つの会場で、白神ももこさん構成・演出『どこ吹く風のあなた、ここに吹く風のまにまに』が上演されました。観客が客席に入場すると、舞台には「デイサービス楽らく」で普段から使われているテーブルや椅子があり、そこには利用者たちが座っています。「本日もデイサービス楽らくをご利用いただきありがとうございます。今日は何月何日何曜日ですか？」楽らくの一日をスタートさせる介護職員からのいつもの問いかけで舞台が始まります。続いて、朝の体操を行い、本日の予定を発表。ぬり絵と白神さんとの「一芸発表会」を行うことが知らされます。普段の楽らくそのままに進み、それを見る観客にとっては、さながらデイサービス見学会のようです。淡々とぬり絵に励む利用者の中、白神さんが一人ひとりのもとを回りながら何をやるか相談した後、いよいよ発表会がスタート。『荒城の月』や『愛燦燦』の歌唱、南京玉すだれ、アコーディオン演奏など、利用者が得意な歌や芸が順々に披露され、観客を沸かせます。その間、白神さんとアシスタントの仁科幸さんは、利用者へ小道具を渡し、照明を当て、紙ふぶきを撒き、時には一緒に踊ったりと芸を盛り上げる演出に大忙しです。中盤は、楽らくで行われる運動会の名物種目「トイレットペーパー送り」や炭坑節の踊りに観客も参加。そして訪れた一芸発表会の終盤、それまでずっと静かに車椅子に座っていた一人の利用者に白神さんが声をかけます。互いの手を握り合いながら、ゆっくりと舞台前面に移動する2人と車椅子を押す介護職員。白神さんと利用者は手を取り合い、顔を見つめ合い、どちらからともなく手と身体を揺らし、職員はそれに合わせて車椅子を動かします。3人それぞれがお互いの呼吸、身体、存在を感じながら舞う静かで温かい特別なダンスに、誰もが息を呑みました。ダンスを終えてほどなく、空間は暗くなり、白神さんが滞在中に撮影した利用者の「声」と「手」が、風によって大きく膨らんだビニールに写し出され(美術:二藤建人)、白神さんは誰もいなくなった夕暮れの楽らくの外へと風のように舞い去っていき、終演となりました。デイサービス楽らくの「日常」が描かれたこの舞台公演は、利用者との関係、日々のケアの様子が描かれるドキュメンタリーであると同時に、「日常」では見過ごされ、体感することのできない、特別な瞬間が観客と共有される時間となりました。また、デイサービスとホールという2会場で開催されたことで、介護職員と白神さんにとってのそれぞれのホームグラウンドで共



白神ももこ「どこ吹く風のあなた、ここに吹く風のまにまに」

振付・演出・出演:白神ももこ [モモンガ・コンプレックス] アシスタント・出演:仁科幸 [モモンガ・コンプレックス] 出演:デイサービス楽らく利用者有志、職員有志
美術:二藤建人 照明:内田直美 [(株)ジャパンスターアート] 音響:泰中彰子 [(株)ジャパンスターアート] 舞台監督:原口佳子 舞台部:前田淳 宣伝美術:ヤング荘 撮影:吉田尚平、古屋和臣、齋藤彰英、森勇馬 協力:白井梨恵 [モモンガ・コンプレックス] 制作:金森千紘 [infans.]、鈴木和幸 [(公財)東松山文化まちづくり公社]、中山智恵 [(公財)東松山文化まちづくり公社]
主催:公益財団法人 日本芸能実演家団体協議会、さいたまアート・フェスタ実行委員会、公益財団法人 東松山文化まちづくり公社、医療法人社団 保順会、一般社団法人 ベンチ文化庁 統括団体によるアートキャラバン事業(コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業)「JAPAN LIVE YELL project」

にケアを考え、交感する機会ともなり、プロジェクト全体を通じて「ケアする/ケアされる」という方向だけではないさまざまな関係性が、利用者・介護職員・アーティスト・観客のあいだで更新される場にもなりました。

来場者アンケート抜粋

会場に足を踏み入れた時から、観客席が舞台上にありワクワクしました。グッと笑える何気ないやりとりを、取りこぼさずに聞いたり見たりできる距離で楽しめました。利用者さんも職員さんも、みなさんひとりひとりその人らしくありのままにいらっやして、素敵でした。白神さんがその間を空気のように、風のように漂う中で、みなさんの個性がより鮮やかに感じられました。そして、思い出だけで心震えるラストダンス。本当に美しかったです。一生忘れないと思います。

みなさんの生き生きとした姿、堂々とした姿に泣きそうになる場面もありました。歳をとるってステキですね。いくつになっても友達はできるのですね。みなさんの人生を聞いてみたくなりました。

見る側の年齢や立場をゆるがされるような感覚がありました。自分の日常と地続きなものを見るからなのか。舞台という場所の特殊さと強さを感じました。

介護とかケアが必ずしも一方通行ではなく、相互交流。人生の先に生きてきた人達とのどのような関係を結んでいくのか。それを考えていく提起にもなっているのかと思いました。介護とアートが結びつく事で、新たな場と関係が生み出されていく可能性もあるように感じました。

介護の事は良くわかりませんが、介護士と利用者さんの接し方をみていて、信頼関係が伝わってきました。歌、南京玉すだれ、ダンスのどれも全てが良かった。最後に涙を流している介護士スタッフを見て、きつといつもと違うことが起きているのだろうと思感動した。

参加職員アンケート抜粋

日々の日常が当たり前のように感じていたことも、全て当たり前ではない、お陰さまで奇跡なんだと感じました。また舞台を開催する時には、参加してお手伝いしたいと思っています。

利用者様を含め、お年寄りはどうだろうと思っていた事が、良い意味で裏切られて、やってみないとわからないものだなと無限の可能性を感じました。普段の活動では見えない、わからない部分を引き出す事が出来たと思います。

白神さんと利用者さんの舞台でのダンスは、私にとって介護のイメージが大きく変わった出来事でした。芸術家と呼ばれる方達が利用者さんや私達スタッフと関わってもらえるなら、今後も新たな発見と気づきが得られるのでは...?と期待しています。

滞在期間
2022年7月29日、9月9日、10月14日、11月28日
2023年1月23日、3月9日～13日、4月21日～24日、
5月1日、8月11日、9月25日、10月9日、10月23日、
12月18日
2024年2月11日、3月28日

アサダワタル



撮影:加藤甫

アーティスト、文筆家。音楽などの表現行為を支点に様々な生活現場に赴き、「これまでにない他者とのつながりかた」をプロジェクトや著作を通じて提案。プロジェクトに「ラジオ下神白」(福島県/2016年-)、「まなざしラジオ!!」(東京芸術劇場/2020年)、「コロナ禍における緊急アンケートコンサート 声の質問19」(東京藝術大学/2021年)、著作に『住み開き増補版』(ちくま文庫)、『想起の音楽』(水曜社)など。2019年より品川区立障害児者総合支援施設ぐるっばアートディレクターを経て、2022年より近畿大学文芸学部教員。博士(学術)。

歌と記憶をつなぐラジオ

2022年秋。新たにクロスプレイ東松山のプロジェクトを始めるにあたって、下見をしながら、アーティストが利用者とのような関係を持ちうるかを考えたアサダワタルさん。関心を持ったのは、楽しくて親しまれている音楽の存在でした。利用者の人生の記憶と音楽の思い出の間には、繋がっているものが沢山あるのではないかと。そう考えたアサダさんが始めたのが、「楽しくラジオ」というプログラムです。楽しくの多くの利用者にとって、若い時代、テレビと同じかそれよりも親しんできたのがラジオです。歌謡曲は、ラジオから聞いたという方も少なからずいます。そこで、「デイサービス楽しくの中だけで流れるラジオ番組(ごっこ)」を始めました。利用者の好きだった曲をリクエストしてもらって、一緒に聞き、その曲にまつわる思い出を聞かせてもらいます。疎開先にいた時に、毎日時報のように流れていた『とんがり帽子』の話をする人。秩父音頭を聞きながら、夜遊びにいった武勇伝を語る人。コンサートによく行っていた歌手の曲を聞き、思わずマイクを取って歌い出す人など、開催ごとにドラマが生まれました。

このように、利用者たちから人生の物語を聞かせてもらいながら、さらにアサダさんは送迎車両に同乗して行き帰りの時間に話したり、時には利用者の家を訪問して話を聞いたりしながら、デイサービス楽しくの人たちのことを知る時間を重ねていきました。

芽吹くように、歌が生まれる

こうして活動を重ねたアサダさんですが、デイサービス楽しくならではの二つの課題がありました。一つは、楽しくを利用する曜日が利用者によって違うため、なかなか同じ人と会えないこと。もう一つは、話したこと、起こったことを忘れていく利用者が多いことです。

せっかく利用者と関係を築いても、次に会った時にはリセットされているような感覚があり、プロジェクトを進展させていくための熱量を生み出しづらい……という悩みをアサダさんは抱えていました。どのように進めていくのが良いか悩みながらレジデントルームの前でギターを弾いていた時、介護職員から「アサダさん、このテーマソング作ってくださいよ」と声をかけられました。その時「日常的に歌われる曲を自分の分身として作って置いていけばいいのか!」と思い立ってアサダさんは言います。

そうして出来上がったのが2曲です。朝、利用者たちを迎える曲である「楽しく日和」。そして楽しくでの1日の終わりの時間に流れる「また明日も楽しくで」。これらの曲は、朝の会と帰りの会で、毎日歌い継がれています。

地元の小学生と一緒に歌を完成させる

曲が出来上がった後、アサダさんにはもう一つ、考えていたことがありました。それは、この音楽が届く先についてです。デイサービス楽しくの中だけではなく、いかに地域の中に溶け込んでいくことができるのか。そう考えていたアサダさんは、施設長の武田奈都子から、あるエピソードを聞きます。

デイサービス楽しくの前は、近くにある東松山市立唐子小学校の通学路になっていて、その脇には、赤い小さな時計台が児童たちを見守るように立っています。ある日のこと、下校中の児童たちが、トイレを借りたいと楽しくに立ち寄りしました。トイレに行く児童たちを見て、利用者たちが、なぜか拍手で出迎えました。

この話を面白いと感じ、子どもたちが、楽しくに興味・親しみを持ってくれるきっかけを作りたいと思ったアサダさん。完成した曲の一つ「また明日も楽しくで」を小学生と利用者が一緒にレコーディングして、その音源を登下校時間に合わせて、時報のように時計台から流れるようにすることを考えました。と同時に、その様子をもとにミュージックビデオを作り、地域外でも見てもらうことを企画しました。

小学校でもこの企画に関心を持ってもらい、まずは4年生の総合学習の時間を活用して、楽しくの見学をしてもらうことから始まりました。児童と利用者が交流を通して、「また明日も楽しくで」一緒に歌い、興味を持った有志の児童たちが、後日レコーディングにも参加してくれることになりました。

そして地域で歌い継がれていく

過去の記憶と未来が歌によって繋がれていくことへの希望から、「また明日も 歌ったような」と名付けられたプロジェクト。2023年10月9日に行われたレコーディングでは、アサダさんの指揮のもと、利用者と有志の子どもたちが、アカペラで一曲を歌い上げました。その後、アサダさんやミュージシャン達の演奏を加え、楽曲が完成します。

同時に、カメラマンの加藤甫さんがプロジェクトと伴走して映像を撮影し、ミュージックビデオの制作に取り組みました。利用者が一文字一文字書道で書いた文字が、歌詞のテロップとして使われています。完成したミュージックビデオは、「音健アワード」に入賞するなど、多くの人に親しまれるものになりました。滞在を重ねながら、同時進行で何が生み出せるのか考え続けてきたプロジェクト。デイサービスの中で毎日のように歌われ、通学路で毎日流れる歌を通じて、アサダさんがいた記憶や、利用者から聞いたかつての言葉たちは、地域に残り続けていくでしょう。



オンラインでアサダさんと歌の練習をする小学生たち



デイサービス楽しくで行われたレコーディングの様子



歌を練習する利用者とアサダさん



書道で歌詞の一文字を書く利用者たち



リクエストボックスをデイサービス内に置いて、リクエスト曲を集めた



「楽しくラジオ」放送の様子



ラジオが流れる中、塗り絵をする利用者たち



2024年2月11日に行われた公開記念イベント



時計台から流れる曲を聴く利用者と児童たち



完成したミュージックビデオ



2024年3月28日には児童たちを招いてお披露目会を行った

ライナーノーツ (アサダワタル)

人々の営みを題材にした歌を作ること、人々の営みが歌になってゆくこととの違いについて。

楽らくという現場で滞在することは、目の前にやることを定めていくような滞在ではなく、だから利用者さんとのやりとりはリサーチや取材といった言葉で表すと、自分に嘘をついていることになる。ふと送迎車に乗りながら、その昔、服を縫製する仕事の傍らご自宅の片隅で駄菓子屋を営んでいたある方の語りを聞くうちに、車窓に流れゆく景色、文字通りその色がどんどん変わっていくような不思議な感覚が訪れ、何度目かの送迎でついぞその方のご自宅にお邪魔できた際には、その語りと場と、そしてその場に居合わせる私が、「向かい合う」のではなく「同じ方向を向く」ことがほんの少しできた気がした。ある知人は、そのことを「共視」と呼ぶ。

想起は人の為ならず、巡り巡って己が為。いつもそう思う。受け止める側にまで変化が伴う運動。でも、受け止めた側がその変化を「表現」するのは簡単ではない。楽らくに滞在しなが

ら、ただ待つだけではさすがにまずいかと思っていたときに、一人の職員さんから「楽らくのテーマソングを作ってください」と言われた。正直に言えば、まったく考えてなかった。さっそく書いてみた。ものすごくはやくできた。メロディも歌詞も迷いなく。「ゆっくりふわりと光浴び じゅくり開いてこえました」。これは、楽らくの日常の佇まい方でもあり、私にとっての表現の過程でもあった。

日常は等しくは訪れない。毎朝歌ってくださる利用者さんも日々移り変わり、子どもたちもたった1日だけ、あの日でしかない「歌」と成る。それは当たり前のこと。「歌」という存在が日常の唯一性を先鋭化させているだけだ。実は、リピート再生などあり得ないのかもしれない。それは毎回、違う。この歌は録音・映像化を通じて作品として固定化した(してしまった)。でも、それを開くたびに異なる景色を滲ませることができたなら。何度でも何度でも、その時その場所で、みなさんの営みも「歌」になればとても嬉しい。

また明日も楽らくで

作詞・作曲・編曲…アサダワタル

一花を揺らして吹く風は
いつか私の 街に吹く
ゆっくりふわりと光浴び
じゅくり開いてこえました

ああ 手を眺めたら
ああ そこに歴史がある
ああ 空西陽さし
今日も楽らくで 日を終える

二歌にぬり絵に体操に
季節の巡り染みわたる
まるく囲んだテーブルで
語る過去にも笑みが咲く

ああ 手を眺めたら
ああ そこに歴史がある
ああ 空西陽さし
今日も楽らくで 日を終える

ああ 手を眺めたら
ああ そこに歴史がある
ああ 空西陽さし
今日も楽らくで 日を終える
今日も楽らくで 日を終える
今日も楽らくで 日を終える

楽らく日和

作詞・作曲…アサダワタル

朝が来たよ 今日も行くと
楽らく日和
越えて行くよ 山も川も
楽らく日和

長く住み慣れた街には
鮮やかな記憶の森
木漏れ日が揺れる
都幾川の水面に
今日はあるの人に会える日ね
これも何かの
ご縁なのでしょう

声がするよ 窓を開けよう
楽らく日和
どこに居ても 想っているよ
楽らく日和

大正昭和平成と
令和まで続く道は
けして平坦ではなかったけれども
過去を物語る瞳には
現在(いま)を祝い合う
光に満ちてる
箭弓神社にお参りして
あなたの幸せ願う



プロジェクトのキービジュアルにデイサービスの前にある時計台が使われている

わたしの記憶のたからもの抱えて

この街に来て早何年目?
そんなことはもう思い出せないわ

朝が来たよ 今日も行くと
楽らく日和

願っているよ 願っているよ
幸せ日和



「また明日も楽らくで」
ミュージックビデオ

アサダワタルプロジェクト「また明日も 歌ったような」
企画・ディレクション:アサダワタル
映像撮影:加藤 甫
宣伝美術:加藤賢策 (LABORATORIES)
記録写真:吉田尚平
協力:東松山市立唐子小学校、株式会社 独楽蔵、新美太基、比島順
主催:医療法人社団 保順会、一般社団法人 ベンチ

「また明日も楽らくで」
作詞・作曲・編曲:アサダワタル 歌:デイサービス楽らく月曜利用の方々、デイサービス楽らく介護職員、東松山市立唐子小学校4年生有志 演奏:アサダワタル (A.Gt, Dr, Cho, etc)、佐藤 亘/もぐらが一周するまで (E.Gt solo)、餘吾康雄/シマクマガンホーズ (Ba)、米子匡司 (Self-made instruments) 録音(歌):庄子涉 ミックス:アサダワタル、庄子涉 マスタリング:西川文章

「また明日も楽らくで」ミュージックビデオ
ディレクション・編集:アサダワタル 映像撮影:加藤甫 テロップ(書道):デイサービス楽らく利用者一同 テロップ協力:関あゆみ 映像提供協力:白神ももこ、酒井直之、Dance Well Network Japan

滞在期間
2022年10月7日、15日、31日、11月3日、
2023年2月5日

よしだこうへい
吉田幸平
／
よしだわこ
吉田和古
(comeya gallery)



本業のデザイン業の傍ら、2015年に、かつて実家があった東松山市でまちのギャラリーとして comeya を始める。東松山近隣や埼玉を活動拠点とする作家の作品展を企画、開催。また、町の記憶をのこすことを目的にした聞き書きの冊子を発行。町への誇りと愛着を醸成するための活動および場作りを行っている。2020年、comeya の活動で埼玉県まちなかりノベ賞(空き店舗、空き地を利用した地域活性化事例のコンペティション)優秀賞を受賞。



展示打ち合わせ中の幸平さんと和古さん

一人ひとりの好きなものを掘り起こす、思い出の写真展を目指して

東松山駅前午後だけオープンする「まちのギャラリー」comeya gallery を運営する吉田幸平さん・和古さん夫妻。地域の作家の紹介と、聞き書きを通じて、東松山の町の思い出を残していく活動に取り組んでいるお二人が関心を持ったのは、デイサービス楽らくの利用者が大切にしているであろう「思い出の写真」でした。

そこで利用者から写真を募集し、和古さんがその写真にまつわるエピソードを聞いてテキストにし、幸平さんがそれらの素材をデザインしたパネルを作り、写真展を開催することにしました。

しかし蓋を開けてみると、写真を撮ったのがどこだったのか思い出せない、写真を持ってきたけれど実はあまり良い思い出ではなかった、家族が写真を持たせたけれど本人もよく覚えていないなど、想定以上に、写真と本人が語る内容が繋がらないケースが多く出てきました。また、デイサービスの活動をしているホールから別室に来てもらって1対1でお話を聞こうとすると、なかなか話してくれないといった場面も。グループで座っているテーブルで話を聞いたり、利用者さんが玄関でひとり帰りの車を待つ時間に話を聞いたりするなど、和古さんは様々な工夫をしながら粘り強く、聞き書きをしていきました。時には写真の具体的なエピソードにこだわらず、今その人が写真から想起された語りたいたいことを、丁寧に聞いていく姿が印象的でした。

写真を通じて受け継がれていく記憶

こうした難しさもありつつ、利用者が持ってきた写真の中には、踊りやお茶などの芸事をされていた写真があったり、今は車椅子に乗っているけれど昔バイクに乗っている写真があったり、嫁入りの時の写真があったりと、職員も知らなかった利用者の昔の姿が生き生きと映し出されていました。また、記憶が鮮明ではない利用者の周りにいた他の利用者や職員が「この店はあそこにあったんじゃないだろうか」など話と一緒に加わったり、利用者が語るエピソードに触発され、隣にいた利用者が「そういえばこんなことがあって」と別の話を語り出したりすることもしばしばありました。



利用者から写真の思い出を聞く



沢山の写真を持ってきてくれた利用者もいた



利用者が持ってきた嫁入りの時の写真から、昭和初期の地域の姿が映し出される

アーティストコメント

この企画に17人の方が参加してくださいました。お話を伺ったのは、大正13年から昭和26年生まれの方です。お生まれは、埼玉県比企地域をはじめ、福島、新潟、埼玉、東京、神奈川、静岡、大阪、沖縄と実に様々でした。皆さん、それぞれの事情やきっかけで、この比企周辺に縁あって越えてきて、今人生の秋を過ごしていらっしゃいます。写真展にむけて、お持ちいただいた写真を手に、懐かしい出来事や思い出等を自由に語っていただきました。ひとり15分から30分とわずかな時間でしたが、滋養に満ちた珠玉の時間でした。おひとりおひとりの語り、その方がその方である証のような言葉があり、その方その方のかけがえのない生き方を感じました。

滞在を通じて、地域への理解が進んだことは大きな収穫でした。また、18人の方々にお話を伺ったことは、人の人生や老いることについてしみじみ思いを巡らす貴重な機会になりました。それは、自分自身の熟成に影響を与えていると思います。



写真の撮影場所がどこだったか、利用者たちと職員と一緒に考える

写真展

「Love letter to… わたしの記憶のたからもの」

2023年 2月6日～19日 デイサービス楽らく 多目的室

2023年3月4日、11日 comeya gallery

デイサービス楽らくとcomeya galleryの2会場で開催された写真展では、17名の利用者の写真が展示されました。

デイサービス楽らくでの展示では、デイサービスの営業時間中にも展示を行い、利用者たちは昼休みに連れ立って写真を鑑賞していました。クロスプレイ東松山で行うプロジェクトでは、しばしば利用者の移動の困難さが課題に上がりますが、施設内で開催したことで、利用者にとっては気軽に見に行ける展覧会となりました。また、展示を見に来た人が、利用者と同じ空間で鑑賞することで、デイサービスにとっての縁側のような場所になっていたことが印象的でした。comeya galleryで開催された写真展では逆に、家族と一緒に再度見に行く利用者もいて、写真展の開催を楽しんでいる様子が見られました。

写真展の開催にあたって、吉田夫妻は以下のように語ります。

「人によっては記憶は忌まわしいものだったり、古い記憶を思い起こしたくなかったりすると思いました。そこで『好きだった』と縛りをあえて付けることにしました。現在 80 歳の方もかつてはバリバリのギャルだったり、イケイケのやんちゃ坊主だったりしたわけで、好きなものを通して、利用者さんの意外な過去に出合えることも期待しています。若い頃の自分の『好き』にアプローチすることで、次世代の人たちが刺激を受ける文化的な発見があるかもしれないと目論んでいます。」

実際に展示された利用者の写真では、子どもの頃のお気に入りのワンピースを着ている写真から、旅先で家族や友達と撮った写真、踊りの発表会の写真など、利用者一人ひとりにとっての、好きなもの、大切に思っているものを表現するような写真が集まりました。

中には、現在車椅子に乗っている利用者がバイクの側車に乗っている写真が出てきて、「えっ、〇〇さんって昔こんなだったの!？」と他の利用者や職員がざわめき立つこともありました。

また、唐子地域に昔から住んでいる利用者の写真では、当時の様子を生き生きと写したものが多く、写真を見た利用者や地元の人たちが、地域の昔の様子や自分の思い出を、写真の前で色々語り合っている姿が見られました。

一方、吉田さんたちが利用者から聞いた中には、写真パネルでの紹介に収まる分量を超えるくらい、たくさん魅力的な話がありました。そこで、エピソードを追加で掲載した冊子も作成し、会場で配布しました。この冊子の存在は、後にデイサービス楽らくに滞在するアーティストにとっても、掲載された利用者の人となりを知る手がかりとして、大いに活用されていきました。



デイサービス楽らく内の展示風景



昼休みに展示を見に来た利用者たち



仲間の利用者の写真を眺める



comeya galleryでの展示風景



37

36

冊子『Love letter to… わたしの記憶のたからもの』の内容



エピソードが掲載された写真パネル



comeya galleryでの展示風景



聞き書きが冊子にもなった

来場者アンケート抜粋

人を通して、この辺りの歴史・様子を知ることができて面白かった。

同じ趣味や関心ごとのある利用者さんとお話ししたり、昔のことを聞いてみたくまりました。

シニアの方のライフストーリー、聞くと語るも面白い時間だったのだろうと思います。

どれも映画のワンシーンのような素敵な写真でした!

写真展「Love letter to… わたしの記憶のたからもの」
企画・編集・デザイン: comeya gallery、吉田デザイン事務所
聞き書き: 吉田和古
主催: 医療法人社団保順会、一般社団法人ベンチ、comeya gallery

Love letter to… わたしの記憶のたからもの

デイサービス楽らくでは、利用者様の思い出の写真と、エピソードを紹介する写真展を来春に開催予定です。開催にぜひご協力ください！
お願いしたい **3 つ** のこと。

- 1** ひとつめ
好きな人、敬愛していた人、大切にしていたもの、好きだった場所や風景が写っている写真をお持ちください。ご自分が写っている写真でも、写っていないでもかまいません。
- 2** ふたつめ
その写真を手にしながら、その時のこと、思い出をお話してください。10分～20分程度。
- 3** みっつめ
お聞きしたいお話を、写真とともに展示させていただきます。

写真が写された当時にタイムスリップして、当時の思い出をもう一度味わってみませんか。
ラブレターを書くような気持ちで読んでいただけたらと思っています。どうぞ書いてご参加ください！

利用者向けに配布した写真募集のチラシ

公募アーティスト1
滞在期間
2022年12月20日～23日
2023年2月20日～3月4日
まつはしかず
松橋和也



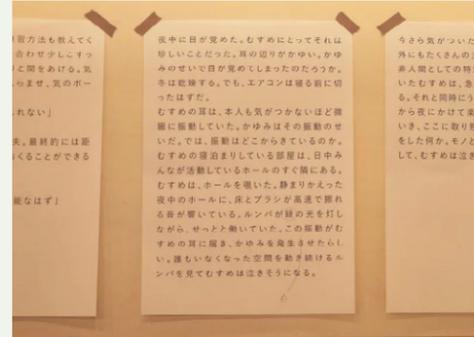
1999年、新潟県生まれ。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科在籍。言葉や身体における個人の表れ方に関心をもちつつ、映像や演劇といったメディアを用いて作品制作を行う。主な展示に「今日は朝から夜だった、目をつむると見えてきた」(2020・藝大食堂ギャラリー)、「TURN 茶会」(2021・国立新美術館)など。近年は演劇作品への参加も行う。出演に「マレビトの会『グッドモーニング』試演会(2021・城崎国際アートセンター)など。



楽らくの中でいつの間にか日々展開される光景を、気づいた人だけが知っている



滞在最終日の帰りの会で、宇宙に帰る挨拶をする



多目的室の壁に貼られた物語。滞在内容を反映して日々更新される

松橋和也さんは12月のリサーチ滞りで、職員でも利用者でもない自分がどうやったらデイサービス楽らくに「居る」ことができるのかを考え、その方法を探る中で、滞在者(アーティスト)と楽らくとの「無関係さ」をテーマに決めます。2月の滞在では、レジデントそのものを「鶴の恩返し」になぞらえながら、その主人公と自分自身を重ね合わせて2週間振る舞う、という居方を試みます。実は鶴は地球に不時着した宇宙人だったと再解釈した物語を考え、滞在中の出来事や利用者から聞いた話もストーリーに組み込みながら、日々物語が更新されていきました。日々の生活の中で松橋さんは時々、宇宙人としての発想で色々な行為をしますが、その行為はデイサービスの時間と共存しつつ、お互いに変化をもたらすこともあれば、ただ隣り合っているだけのこともありました。ある日、楽らくの円形の中庭からミステリーサークルをイメージした松橋さんが中庭でUFOを呼び続けていると、「頑張れ」と応援する利用者の姿も。滞在最終日には、松橋さんが宇宙人の姿になって、毎日恒例で行っている「北国の春」に合わせた体操を利用者と一緒に行いました。また、松橋さんは「無関係さ」というテーマから、楽らくにある物品と人々との関係にも目を向けます。アーティストと利用者の関係との共通点を感じ、加湿器や掃除機「ルンバ」をはじめとして、楽らくにある様々なモノの写真も撮影しました。滞在中に編まれた物語やモノの写真は、後日松橋さんが制作した記録冊子『鶴/UFO/ダイソー/杖/ルンバ/体操』の中でも見ることができます。

アーティストコメント

自身の活動とデイサービスの日常がそれぞれ独立してあることをテーマのひとつにしていたこともあり、積極的に変化を生み出そうというよりは、その関係/無関係そのものについて考える時間になりました。自分の中でもともと感じていた、「日常の中にある劇」への実感がより深まりました。楽らくにどういふふうに住居続けることができるかを考えたときに、やはり劇をつかったし、あたらしい劇をつくることで、それまでの劇を相対化できるのだと感じました。



後日制作された、滞在記録と物語が綴られた冊子『鶴/UFO/ダイソー/杖/ルンバ/体操』

公募アーティスト2
滞在期間
2023年3月7日～3月27日
やすむらた
安村卓士



1995年広島県生まれ。秋田県在住。秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科修士課程修了。身近な素材を組み合わせて、触れてあそべる「おもちゃ作品」をつくる。あそびの空間は、人間性を緩やかにとほぼと。近年の展覧会に、個展『いたりきたり/たったりすわたり』(鴨江アートセンター、浜松、2022)、『ふしぎな洞窟』(高円寺グッドマン、東京、2020)、グループ展、『手つかずの庭』(THE ROOMERS' GARDEN、宮城、2021)などがある。



一本一本違うデザインで、60本制作されたダンベルたち



安村さんが作ったダンベルを使って体操する様子



利用者さんから風の作り方を教わる安村さん

アーティストコメント

自分の作品の表現方法として、展示ではなくて、福祉の現場で何かできるだろうかという興味から応募しました。結果的に最初に予想していたことは大きく違うものになったのですが、それはそれでよかったかなと思っています。僕の作ったダンベルを利用者が当たり前のように使ってくれたり、スタッフの方々もすんなり受け入れてくださったりと、施設の日常に新しいものもすんなりと入っていける寛容さがあるように感じました。



季節の塗り絵の中に紛れ込む、安村さん手描きの塗り絵

日常の出会いや出来事から着想を得て、手作りの「おもちゃ作品」を制作している安村卓士さん。当初、滞在中に利用者さんから子供の頃の思い出の遊びやおもちゃなどの話を聞き、そこで得たアイデアをもとに施設で使えるオリジナルの遊びやおもちゃを作ろうと考えていました。しかし、利用者さんと話す時間を重ねた安村さんですが、お手玉や凧揚げ、かくれんぼなどの話は出るものの、地域独特の遊びの話が出ることは意外と少なかったと言います。そのような中で安村さんは、「楽らく」で使われているものたちに「おもちゃ作品」の要素を見出し、そこに介入していくことの可能性を感じました。一つは塗り絵です。利用者さんたちがレクリエーションの時間に「季節の塗り絵」から好きなものを選んで塗っている様子に注目した安村さんは、手描きで何種類もの塗り絵を作り、紛れ込ませました。もう一つは、朝の体操で利用者が使っている紙製のダンベル。鉛筆やお寿司、魚、野菜などに見立てた一本一本違うデザインのもの、新聞紙とガムテープで制作しました。これまで全て同じデザインだったダンベルが、全て1点もののユニークなものに変わりました。自身の作品が日々の生活で使われ続けるものになったことを見届け、安村さんの滞在は終わりました。

滞在期間
2023年4月30日～5月16日
2023年5月20日～27日

公募アーティスト3

桂融
けいゆう



中国北京出身。2016年来日後6年間、特別養護老人ホームでのアルバイトを通して認知症ケアを習得する。同時にアートはいかに認知症高齢者を助けるかを起点として、2018年に女子美術大学ヒーリング表現領域の修士課程に入り、ケアとアートに関する作品を製作。2020年に東京藝術大学の博士課程に進む。研究テーマは認知症高齢者の創作力。六本木の国際保育園で定期的なワークショップを行い人間観察による子どもの成長・発達と高齢者の老化・衰退を理解し、人間の多様な表象を探っていく。



船はウレタンやビニールシート等柔らかく身近な素材を使用し、段差のない作りになっている



中庭に出した海で釣りゲームを楽しむ利用者



装飾に使用する帆に字を書く利用者。最初は躊躇していたけれど、交流する中で次第に参加を楽しむように



大きなサメのオブジェを制作する桂融さんと見守る利用者

桂融さんがデイサービスに滞在し、作品の展示場所として選んだのは中庭。身体的な制約や地理的な理由から実際に海に行くことが難しい状況にある地域の高齢者に向けて、海のない東松山に海を出現させるプロジェクト「東松山で航海する?!」が始動しました。

当初は、制作した船のオブジェに利用者が乗船し、オールを漕ぐ動作をリハビリ体操につなげるといったアートインスタレーション×リハビリ運動を構想し、どのような効果が出たかエビデンスを取るところまでをプランに挙げていた桂融さん。利用者や介護職員と交流する中で、アートインスタレーションを媒介に、コミュニケーションが生まれる環境を作る試みへと舵を切りました。オブジェの素材として選んだのは、近隣のホームセンターで手に入れられる身近な素材。安全性に配慮しながら、利用者にも作品制作に参加してもらいました。テープを貼るといった作業一つにしても個々のこだわりが垣間見えることも。また、参加することに躊躇していた利用者が桂融さんとの交流を経て制作に関わり、実際に作品が目の前に立ち現れると、不安や戸惑いが自信や興味へと変化するプロセスも見られました。天候の良い日は中庭に出て、みんなで制作したオブジェの上で魚釣りゲームを楽しむ利用者の明るい表情が印象的でした。

アーティストコメント

ある利用者が旗に文字を書くことに最初は抵抗感を示したのは、自分の字が見栄えが良くないと感じていたからでした。しかし、コミュニケーションを続ける中で、彼女は文字を書くことに同意し、最終的に作品が展示されている間、その方は積極的に周囲の利用者に作品を紹介していました。制作活動に参加した利用者は、より作品との関わりに積極的になると感じました。高齢者にも芸術を体験してもらうためには、高齢者にも馴染みのある素材を使用することが重要だと考えました。そうすることで、芸術は崇高なものだけでなく、日常生活にも取り入れられるものであることがより理解されやすくなると考えたからです。



滞在最終日、余った材料を使ってホールにある2本の柱にクッション性のある飾りを残していった桂融さん。柱の近くに座る利用者さんが体を柱に預ける際のクッション代わりに使うなど、安全面にも配慮したのとして活用しています。

滞在期間
2023年10月27日～11月17日

公募アーティスト4

仁禮洋志
にれいひろし



© 青柳マナ

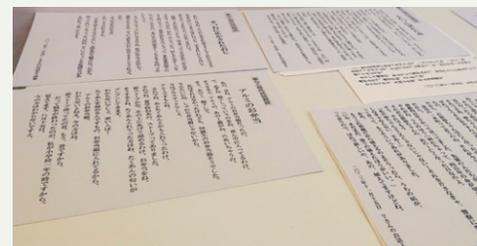
アーティスト。自他の輪郭を起点に、それぞれを取り巻く環境やなりたちを観察しながら、最適な形をテーマに作品制作をしている。銚子への逗留をきっかけに民話と出会い探訪活動を始めた。過去の個展に2021年「伸縮する輪郭」(銚子市、ロクの家)、2023年「超・不定期訪問/滞在制作project << Nami Ita に、いた?いる! >> Vol.6『もうれんやっさ』(町田市、ナミイタ)など。2019年～2021年までアートプロジェクト「SUPER OPEN STUDIO」の運営に携わり、オンライン上映プログラムを企画した。



デイサービス楽らくで採集した物語「狐に化かされた叔父の話」を読み歩く仁禮さん



利用者たちに聞き書きした民話を壁に貼って紹介する



動物の話、地元の話、子どもの頃の思い出の品の話など、民話のもととなる様々な話が集まる



仁禮さんがある職員から聞いた「狐に化かされた話」の朗読を練習する様子をもとにした映像作品「ある聞き書きの朗読練習」からの1シーン



リハビリ中の利用者へ、採集した民話を聞いてもらう

アーティストコメント

当初のプランとは大きく変わった過ごし方となりましたが、本筋は変えないままに過ごすことができました。普段の楽らくの仕事の中では起こりえない会話や光景を作り出すことができました。例えば楽らくの事務所内では狐の話が一時流行したり、ある利用者さんは誰にも見せたことがなかった大切な秘伝を私や職員さんにお披露目してくださいました。読み聞かせる途中に利用者間で共通の話題となるキーワードが出ると、そのワードを知っている者同士での会話が生まれ、また新しい昔話へと派生したり、読み終わった後に補足の話を聞かせてもらったりと、予期せぬコミュニケーションが生まれました。

民話の採集を目的に滞在した仁禮洋志さんは、利用者や職員から、思い出に残る昔話を聞き回るところから活動を始めました。ところが、利用者から昔の話を聞こうとすると、戦争の話になりがちでした。本人にとってこれまでも語り続けてきた内容であり、人によっては触れてほしくない記憶であると感じた仁禮さんは、話し方や話題の変え方などを工夫しながら、利用者にとって非日常の「民話」を引き出せるよう試行錯誤していきます。

そんなある日、仁禮さんがこれまでに聞いた話を多目的室内の壁に貼り出したところ、利用者や職員が昼休みに見に来ました。文字が読みづらい人のために、仁禮さんや職員が朗読すると、その話を聞いて利用者から「私はこういうことがあった」と思い出話が出てきます。このことからヒントを得た仁禮さんは、採集したエピソードの朗読を行い、その後に利用者から話を聞いてみることにしました。滞在最後の2日間は、これまでの聞き書きした話から数話を抜粋して利用者の手元に配り、仁禮さんがその話を読み歩く時間を設けました。話の中身から触発され「あの場所は昔こんなだった」「わたしの田舎ではこんなことがあった」と話が広がっていきました。

仁禮さんが「これから東松山の昔話を紹介します」と言って読み歩きを始めると、なぜか急に機嫌が悪くなる利用者さんがいました。職員も交えてその理由を考える中、他の地域から移住して来られた方だったため、地元・東松山の話ということに引掛かりを感じているのではないかと、その可能性を考えました。そこで仁禮さんが翌日試みに、「私が皆さんから聞いた、語り継いでいきたい話を紹介します」と言って読み歩きを始めたところ、その利用者は非常に喜ばれていたことが印象的でした。

滞在期間
2023年11月22日～12月6日
2024年1月24日～2月7日

公募アーティスト5
浅川奏瑛



埼玉県越谷市出身。新体操の経験を経て18歳から踊りはじめる。尚美学園大学芸術情報学部舞台表現学科ダンスコース卒業。三輪亜希子、清水典人に師事。現代社会に対する違和感や危機感を作品創作の核とし、光や闇、生と死、戦争と平和といった様々な“境界”の中で語られる存在の有限性を描いた作風が評価されている。ヨコハマダンスコレクション2021-DEC 最優秀新人賞、アーキタンツ・アーティスト・サポート賞受賞。SAI Dance Festival2023ソコ部門にて審査員賞受賞並びに京都嵐山芸術祭招聘。



中庭で利用者、職員と共に踊る



踊りを解禁した日の浅川さん



隣に座ると昔の記憶や自分の事を語りだす利用者さん



「また明日も楽しくで」を帰宅前の利用者さんと共に踊る

滞在を前後半の2回に分けて過ごした浅川奏瑛さん。前半は「ダンサー」としての肩書きは名乗らず「いつもいる子」として利用者との交流を試みました。慣れない場所で、はじめましての利用者と積極的に関わっていくのは精神的にも体力的にもタフさを求められ、また、認知症特有の“忘れてしまう”事象に自分自身の存在が透明になっていく感覚に襲われ、空間での居方を見つめ直す時間を過ごしていました。前半の滞在も終わりに近づくとある日、浅川さんは踊りを解禁。「いつもいる子」から「踊る子」になった浅川さんは、その日の午後の一コマで踊りを披露することに。決まった振り付けはなく、その場の空気やその時の気持ちを即興で表現をする浅川さんの伸びやかな踊りに、利用者も心躍るような表情で拍手を送っていました。

滞在後半では自身のソコ公演に向けた、創作のための記録を軸に滞在し、どこか落ち着いた雰囲気になり、楽しくに居る姿勢に変化も見られました。何を求めるわけでもなく利用者の隣に座ると、利用者がとつとつと語りだす。その言葉に浅川さんが耳を澄ます。そんな光景が広がっていました。そして、自然と利用者や職員と共に楽しくのテーマソング「また明日も楽しくで」(*1)に振付を考え踊る時間が生まれました。浅川さんは今回のクロスプレイ東松山での滞りを経て、2024年夏に都内でソコ作品上演を予定しています。

*1 2022-2023年度アソシエイトアーティスト アサダワタルプロジェクト「また明日も歌ったような」で生まれた2曲の内の1曲

アーティストコメント

毎日たくさん自己紹介をして、出身や何をしているのかを話すうちに自分が何者なのかを見失いました。ですが自分を見失い“透明”になると、存在の自由度が増していくことに気がつき、デイサービスの在り方や自分の居方に楽しさを見出すことができました。そこからは職員さんや利用者さんの心の動きや空間の気の流れのようなものを見つめていました。“過去と現在(いま)を繋げ、現在(いま)と未来を繋げる”。私がこの滞りを通して自分の胸に刻んだキーワードです。なぜ私が戦争や生と死をテーマに作品を作っているのかが明確になったし、この滞りを通して平和への願いがより強固なものになりました。

浅川さんが毎日綴ったレジデンス日記はwebでご覧いただけます



アサダさんと交流。ジャンルや視点が異なるアーティストとの交流は双方に刺激になることも



利用者さんに作品制作の支援をする浅川さん

アーティストコメント

近年、アートと福祉を合わせたプロジェクトをよく見かけるので、アートと福祉は親和性が高いにちがいないという期待を持ってクロスプレイに参加しました。しかし、実際の福祉の現場に入ってみると、とにかく周りの人に好かれる、良好な関係性を作りたいという欲求が自身から湧いてきたことに驚きました。普段、創作の現場で大切にしている「嫌われることを恐れない」というマインドを一切失ってしまったからです。しかし、介護実習の経験を通し、介護士さんたちの仕事に身近に触れさせていただいたことで、ただ「好かれたい」という気持ちでなく、利用者さんや介護士さんの見ている世界を自分も見てみたいと強く願うようになりました。それは、私が普段携わっている「演技」の世界と強く通じ、非常に刺激的でした。また、「楽しく」はとにかく来客が多く、素敵な立ち話がたくさん生まれる場所で、中でも、違和感や葛藤を強く感じていた時に、丸木美術館の学芸員さんとお話させていただいたことが、とても貴重な体験となりました。

施設長の提案で、浅川さんが滞り中に考えていることを文章にして介護職員に渡してみることに。その文章は浅川さんのブログからご覧いただけます。『「イディオリトミー」的デイサービス楽しく』



クリスマス会のサンタとトナカイ役を浅川さんのコラボレーターが担当することに



浅川さんと利用者が互いに手を温めあう時間が生まれました

滞在期間
2023年12月11日～22日、
2024年1月8日～19日

公募アーティスト6
竹中香子



俳優、日仏通訳、プロデューサー。2011年に渡仏し、日本人として初めてフランス国立高等演劇学校の俳優課程に合格し、2016年、俳優国家資格を取得。パリを拠点に、フランス国立公立劇場を中心とした多数の舞台に出演。2017年より、日本での活動も再開。様々な教育機関で、フランスの演劇教育や俳優のハラスメント問題に関する講義やWSを展開。2021年、フランス演劇教育者国家資格を取得。主な出演作に、市原佐都子作・演出『妖精の問題』『蝶々夫人』。2023年より、太田信吾監督作品を扱う映像制作会社ハイドロプラストのアートプロデューサーを担当。

「デイサービスで経験するアイデンティティ・クライシス」。これは竹中香子さんが前半の滞りを終えた後に投稿したブログのタイトルです。高齢者福祉施設は人員配置基準に基づき、介護職員や看護職員などが配置されており、基本的には専門性や役割を持つ職員と、通所する利用者しかいない場所です。そこにポンッと投げ込まれ滞りするアーティストは、自分の在り方を問うことになります。役割を与えられることによって居心地が良いと感じることもあれば、役割を持たずに存在することで自由な創作ができることもある。浅川さんは前半の滞在2日間ほどは、本人も「棒立ち」状態だったと振り返りつつも、利用者やアソシエイトアーティストのアサダさんとの交流、デイで開催されるクリスマス会への参加といった時間を経て、悶々とした気持ちを抱えながら後半の滞在へと繋げていきました。後半の滞在では、「介護実習生 竹中香子」として、介護職員と同じエプロンを装着し、実際の入浴介助、アクティビティのサポート等に入りました。ケアについて書籍などで学んで想定していたこととのギャップや、考えていたことが機能しない滞りに頭を悩ませていました。そんな中、入浴介助中に体感したケアの眼差しや、介護職員から「一日たりとも同じ日はないのよ」と言われて気づく不確実性などを通して、これまで考えていたことと目の前で実行されていることが繋がり、視界が開けていったとのこと。この滞りを経て、浅川さんは演劇パフォーマンスを上演する予定になっています。

公募アーティスト7
滞在期間
2023年12月25日
2024年1月22日～1月23日、
2月8日、2月19日～21日、
2月26日～27日

あおきむぎお
青木麦生



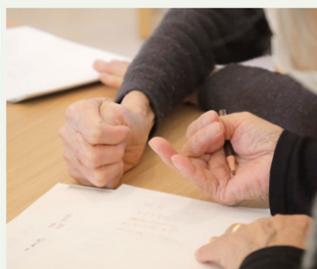
歌人。大学在学中、歌人・水原紫苑の授業を受けたことをきっかけに、短歌創作を始める。
2000年、短歌研究臨時増刊『うたう』にて作品賞佳作。2010年にカットイングシートで切り抜いた短歌を街に貼った様子を写真に収めた処女歌集『阿佐ヶ谷ドクメンタ』を電子書籍として発表。以降、松戸アートラインプロジェクト、黄金町バザール、BCTION、SONICART、池袋モンパルナス回遊美術館などのアートプロジェクトに参加。川の護岸や街路樹など、街の至る所に自作の短歌を貼り付けたサイトスペシフィックな作品を展開している。



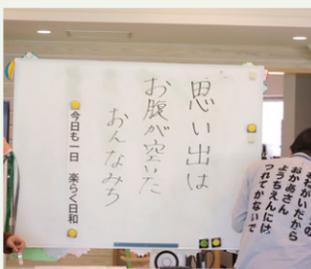
出来上がった「楽らく短歌」を庭側の窓に展示



デイサービスの日常に溶け込む短歌（入浴後髪を乾かす洗面台）



隣の席の人と5文字を探す利用者の手つき



くじ引き方式で引き当てた言葉で紡ぐ、利用者同士の共作短歌

短歌を作るため、利用者から言葉の採集を試みた青木麦生さん。試しに「短歌を作るので何か5文字の言葉は思い浮かびますか?」と話しかけたところ、利用者は身構えてしまい、詩的な言葉を捻り出そうと考え込んでしまいます。より自然でありのままの言葉を引き出したいと思った青木さんは途中から「滞在する事＝同じ時間を共有すること」に意識を向け直し、一緒に体操や作業をしながら利用者や雑談をしたり活動の様子を描写することで短歌の素となる言葉や感情を集めていきます。
滞在中に青木さんが作った「楽らく短歌」は、ホールの窓にカットイングシートを使って展示。ある日、一人の利用者が青木さんに「楽らくで 今日も一日 ありがとう」と話しかけました。展示された短歌を眺めながら、考えていた言葉が並んだ瞬間だったのかもしれませんが。さらに展示を洗面台や中庭にも広げ、ふと目にした利用者がクスッと笑う。そんな時間が生まれました。
滞在最終日は、共作短歌作りを行いました。思い浮かぶ5文字を書き出してもらい、その中から一人1つの言葉を選び、くじ引き箱に集めます。そして、引き当てた5文字に青木さんが準備した7文字を付け加え、次にまた違う人の5文字を引き当てる。そして下の句に設定された「今日も一日楽らく日和」で締めて一首完成。なかなか5文字が思い浮かばない利用者には、歌集から気になる5文字を探し出してもらうことで、言葉探しゲームとして楽しみながら参加できる工夫をしました。利用者が探し出した5文字は短い言葉でもそれぞれを表現する言葉であり、日常や人生のある一コマを映し出す表現活動となりました。

アーティストコメント

滞在中に短歌の素となる言葉を集めたカードは200枚以上となった。その一つ一つを見ると、利用者の方と交わした会話や姿など、楽らくでの出来事が昨日のように思い出すことができる。今まで高齢者と身近に接することができる。今まで高齢者と身近に接することが少なかったため、1週間前に話したことが次に会った時にはすっかり忘れていたといった経験はとても新鮮だった。人との関係性の作り方として、盛り土を重ねていくような形ではなく、砂時計を反対にしていくような関係性の作り方をしなければならぬと感じ、より今現在の相手と向き合うことを心がけるようになった。人の話から想起して短歌に昇華する手法は以前から構想していたものの、なかなか取り組むことができていなかったのが、今回滞在中にじっくり試すことができたのは、今後の自身の創作活動を続けていくうえで大きな糧となった。



「楽らく短歌」は折本にしてデイサービスに残ることに。



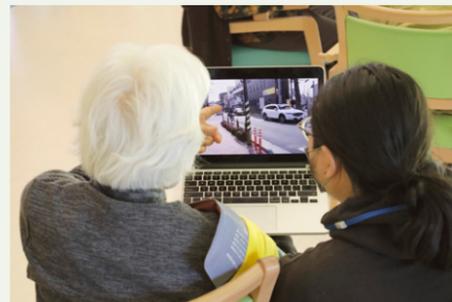
利用者と話をする野村さん



職員からも話を聞く



職員の終礼に参加



昔住んでいた街の様子と一緒に動画で見る

アーティストコメント

演出家やグループホームの世話人という立場・仕事上の関心に加えて、将来的に自分の親やもちろん自分自身にとっても避けられない老いという、人としての関心に気付かされることが多くありました。
職員さんが利用者さんの現在の様子に気を配り、利用者さんの明日のために取り組んでいるのを見て、わたしは自信をもって利用者さんの「過去から現在」までのお話を聞くことに集中しようと決めることができました。
福祉や介護だけでなく、医療という制度に演劇が関わるとき、ひとそれぞれの「できること」を探すのが面白いと思います。また、そこから、観客や観客席というものについて、演劇において通常想像しづらい「たったひとりの観客」や「ひとりのための観客席」といった構想に厚みが生まれました。誰がそこに座るのか、その誰かについて具体的な他者を想定できること、演出家としてこれは大きな発見であり、今後の取り組みに与る影響は大きいと思います。

滞在期間
2024年3月1日～15日

公募アーティスト8

のむらまさとお
野村真人



photo by shimizu kana

2016年より京都を拠点に演出家として活動。レトロニムというコレクティブのメンバー。ひとの精神のありようや対話のズレに関心を持ち、ひともの・環境の現実的な関係に演劇的視点を引用しながら作品を制作している。近年では、精神医療や民俗学に関心を寄せ、ケアの現場のリサーチや自身のルーツにある青森県津軽地方のお墓のフィールドワークを行うなど、劇場内外で幅広く活動している。また、#部屋と演劇のメンバーでもある。

普段は京都を拠点に、演出家として、また知的障害のある人たちのグループホームの世話人として活動している野村真人さん。滞在中、ある時はテーブルの周りで、またある時は「イー・ウォーク」という歩行運動器具で歩く運動をしている人の近くに行って、利用者とはさまざまな話をしました。普段無口な利用者でも、野村さんには色々なことを話し、その話の一部を他の職員とも共有すると、それまで知らなかった利用者の意外な側面が分かり、職員も大いに驚かされていました。
野村さんが特に関心を持ったのは、利用者たちが昔行っていたけれど今は行っていない場所についてです。山形、愛知、沖縄など色々な場所の話や、野村さんは昔都内に住んでいた一人の利用者に興味を引かれます。近所に映画の撮影所があり、エキストラを募集する車に乗ってよく撮影所に入ったというその方の話に興味を持った野村さんは、住んでいた街を実際に訪ねてみることにしました。
現地に着いたところで利用者と電話を繋ぎ、当時の記憶をもとに、街中を道案内してもらいます。昔はあった寺の中を通り抜けるルートが封鎖されていたりと、色々な変化を体感しながら撮影所まで歩きました。後日、その時に撮影した映像を野村さんと利用者が見て楽しんでいる姿が印象的でした。
記憶の街を追体験した野村さんが感じたことは何だったのか。今後、作品に反映されていくことを楽しみにしたいと思います。

滞在期間
2024年3月18日～20日、
5月13日～24日

公募アーティスト 萩原雄太



1983年生まれ。個人の身体と公共との関わりに焦点を当てた作品を創作。2011年、福島第一原子力発電所事故の避難区域から数百メートルの場所で『福島でゴドーを待ちながら』を上演。日本国憲法を扱った『俺が代』は、2017年ルーマニア国際演劇祭 Temps d'Images Festival に招聘される。その他の代表作にシアター・ commons '18 に招聘された『しあわせな日々』や、コロナ禍において創作した『電話演劇シリーズ』など。Theatertreffen International Forum(ベルリン)参加。Asian Cultural Council のフェローとしてニューヨークに滞在。



レッドカーペットを楽しみながら歩く参加者



萩原さんが主宰する劇団・かもめシーンの「電話機で聞く演劇作品」を職員に聞いてもらう



お気に入りの服で記念撮影



和装で来られた出演者にインタビュー

当初は楽らくに身を置いて、死について考える時間を過ごすことをイメージしていた萩原さんですが、送迎に同行したり利用者一人ひとりと話をすることで、「この人たちと何か楽しいことができるだろうか」と考えるようになりました。そこでレクリエーションの時間を借りて、利用者がお気に入りの服を着て出演するファッションショーを実施することにします。

準備期間は、利用者それぞれの状況や配慮したい点など、職員と萩原さんとの間で十分に連携できず苦労することも。日常の関係性や約束事が構築されている福祉現場に、短い期間アーティストが入ってプロジェクトを行うことの難しさが現れた場面もありました。一方、ファッションショーを楽しみにしている利用者の声に答えようとすることが、共通の目標に。準備や当日の進行では職員からも色々なアイデアが出て、さながら萩原さんとの共同演出といった様相になりました。

そして迎えた本番。エントリーした5名の利用者が、お気に入りの服、いつもとは少し違う服を着て参加。レッドカーペットの上を歩くのが夢だったという人もいます。化粧をして外出する機会が少ない人も、この日は職員も協力してメイクをします。レッドカーペットの上を歩く利用者たちは、緊張しながらも、どこか誇らしげ。萩原さんの合図で、思い思いにポーズを決め、観客となった周りの利用者たちも、サイリウムや布を振って応援します。出演が終わった後は、萩原さんが利用者たちにインタビュー。大事な服の思い出や、戦争で服がなくなった話など、普段デイサービスでは話題に上らないエピソードが多く語られました。

終了後は多くの利用者がレッドカーペット上で記念撮影し、普段のデイサービスから少し離れた非日常の場を楽しんでいました。

アソシエイトアーティスト 振り返りトーク

2022年7月のクロスプレイ東松山の始動に伴い滞在が始まった3組のアソシエイトアーティスト。それぞれ滞制作がひと段落した2023年5月、オンラインで活動の振り返りを実施しました。

吉田幸平・和古 アートとケアの接点を地域で作る

和古:「聞き書き」を写真展の形にしてはどうかと提案させていただいて、写真を軸にして、そこから皆さんの過去のお話の聞き取りが始まりました。18人の方にお話を聞いて、それをパネル化して楽しくて展示をし、駅前近くの comeya でも展示したという取り組みでした。

幸平:初めてのことであったので、一体どのくらいの方が興味を持ってくださるか本当に未知数だったところで、少しずつ増えていって、最終的には結構皆さん出してくれました。完全に僕のイメージだけど、高齢者の方だからもう少しモノクロ写真が来るかと思ったら、割とカラーが多くて。そこは意外だったんですね。

和古:私が興味を持っているのは地域の歴史なのですが、反応としてはちょっと変化球的なものでした。ただ、その中でも、必ず何か時代的な気付きがあるものなんだなと思いました。地域性とか、その時代の生き方とかが滲み出ている。私としては、とても十分な内容を聞き取らせていただいたと思っています。

幸平:comeya に来た方でも、楽しくさんを知っていて、でも移転して新しくなったってことは知らないと言っていて。そこで写真展やっていて気軽に見れますよって言うと、じゃあ行ってみる、という方がいらっしゃいました。

和古:comeya の展示も、あまり人が来ないかなと思ってたら、結構来てくださって。意外だったんですね。このアートの活動にも興味を持って、あの建物にも興味を持って人たちが、これをきっかけに接点を持って、実際に足を運んでくれたことが面白かったです。

アサダ:写真展を観させていただきましたが、とても参考になりました。アソシエイトアーティストの3組が、時系列がやらずながら色々活動していて、でも、対象になる楽らくの利用者さんは、同じ方々が重なりますよね。その中で、吉田さんたちが、お話を聞いて写真と冊子にまとめてくださっていることが、利用者さんとコミュニケーションを新たに取る上で役立ちました。色々なタイプのアーティストやクリエイターが関わって、お互いフォローし合っている感じが、クロスプレイの枠組みとして面白いと感じたのと同時に、助けられました。協力体制みたいに、それぞれがアプローチを探っていて、

じゃあ自分はこの辺りのことをあえてやってみようとか、それぞれ積み上げたものを受け継いでいながら、次に何をやるか考える機会になりました。

和古: NHK で (クロスプレイ東松山が紹介された時) 武田奈都子さん、藤原さんが「アートとケアはすごく親和性がある」ということをおっしゃっていて、「ああ、そうだな」と思いました。ケアはネガティブなもので、アートは最先端、みたいになんか別ものように思われているけれど、実際よく見ていくと、すごく繋がっていると思います。写真展の反応が良かったのは、そこをうまく刺激できたのかなと思っています。

アサダワタル 日常に漂う感覚が自然と自分の中に入り込んで、それを受け継いでいる

アサダ:2022年の夏から1.5～2日の滞在を大体1ヶ月に1回とか、1か月半に1回のペースでやらせていただきました。何をするかを全く決めずに現場に入って、ひとまず最初はラジオというコミュニケーションスタイルで、利用者さんからリクエストとエピソードを寄せてもらいました。それ自体は、自己紹介というか、こんな風に音楽で皆さんとやり取りをしたいと思っていますということが伝われば、ありがたいなと。それが重なっていったら、発展する何かが生まれるかもしれないなと。

当初1つあり得るかなと思っていたのは、懐かしい思い出の曲と、それにまつわるエピソードをちゃんと編集して、例えば展示室で聴いてもらいたいなこと。それで、何人かに絞ってお話を聞きに行ったりとか、送迎の前のちょっと空いた時間にお話を聞いたりしていました。一方で、デイサービスの場所で、個別に密度を持って話を聞くのは思った以上に難しいと思ったんですね。

その時、(公募アーティストの) 安村さんと滞在が被ったのは、結構大きくて。彼は普段の体操に使うダンベルを日常のレクに落とし込むスタイルを取っていて、自分もそのスタンスはすごくありだなと思って。自分なら何かかと思った時に、そうか、毎日、歌を落とし込んだらいいんだって。そんな風に、その時それぞれの痕跡みたいなものを受け継がせてもらっている感じがあります。

アーティストコメント

何名かの利用者さんとは、お話を重ねるごとに、だんだんと話せる内容が深くなっていったのが印象的でした。特に、デイと家との送迎に同乗しながら利用者さんと会話を交わした時間は、個人的にも得難いものとなりました。また、ファッションショーに参加してくれた利用者さんは、レッドカーペットの上を歩いたり、声援を送るだけでなく、ファッションと自分の思い出にまで話を展開してくれたことも、印象深いできごとのひとつです。

しかし、よかった事ばかりでもありません。いわゆる「芸術業界」の外部で生活する方々を巻き込むプロジェクトは、普段は出会えない人々と関わり、刺激を受けられる一方、双方の仕事に対するコンセンサスが求められます。しかしながら今回、リソース的にこの相互理解の時間をとれず、コミュニケーションが難しい場面もありました。作品性ではなく、関係性の中から物事を立ち上げていくことの難しさを実感する機会にもなりました。

クロストーク「介護の現場で生まれる、文化的な出来事たち」

2024年2月、アサダワタルさんがクロスプレイ東松山で実施したプロジェクト「また明日も 歌ったような」で制作した楽曲の1つ『また明日も楽しくで』のミュージックビデオの完成披露とプロジェクト紹介のイベントを開催しました。

第二部では、長津結一郎さんによる活動評価 (p.30-32参照) と、ゲストを招いたクロストークを実施。福祉の現場で、いかなる交流が生まれ、どのようにケアとつながっているかをゲストを交えて語り合いました。本稿ではクロストークで交わされたお話の一部を抜粋してお届けします。

出演：アサダワタル

岡村幸宣 (原爆の図丸木美術館 学芸員)
中田一会 (ウェブマガジン〈こここ〉編集長)
武田奈都子 (デイサービス楽らく施設長)
藤原顕太 (bench)
武田知也 (bench)

司会：長津結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院 准教授)

デイサービス楽らくから徒歩20分程の場所にある「原爆の図丸木美術館」学芸員の岡村幸宣さんは、アーティストが滞在している際に見学をして話を聞いたり、美術館にアーティストを招いて交流するなど、同じ地域にある文化施設の関係者として近い距離で活動を見守りつつ、時にアーティストにアドバイスをするなどして関わっています。普段から刺激をもらっているという岡村さんが印象的だった出来事として、アーティストの反応について語りました。

最近滞在された方が、「アイデンティティ・クライシス」と、非常にインパクトある言葉を使っていたらっしゃいました。海外のレジデンスよりも、ここに来る方が自己が崩壊するをおっしゃっていて。これはきっと、大なり小なり皆さんが感じてることだと思います。ここに来ると、自分の立ち位置を見直さざるを得ない状況になり、最終的に色々な成果が出てくるけれど、その前の段階では苦しんでいることが多いような気がします。それはアーティストにとって素晴らしい体験であると思います。

ウェブマガジン〈こここ〉編集長の中田一会さんは、「個と個で一緒にできること」をキーワードに、福祉の現場にある創造性をたずねていく〈こここ〉での活動や、アサダワタルさんの連載に触れつつ、アートプロジェクトの現場で起こる「変化」を受け入れることの大切さについて指摘しました。

〈こここ〉でのアサダさんの連載では、アートが福祉の現場に入っていく時のことや、福祉の現場で見られる表現的な瞬間を、アサダさんの視点で描いています。その中で、アートを仕掛ける

幸平：確かに、あの中で密になるのは難しいと、和古さんも言っていました。でも、音楽が流れてて、他のテーブルの方ではおしゃべりしてるかもしれないけれど、耳に入ってくる。その音楽が流れていると、この時はこんなことしてたとか、自分の中で蘇ってくる。利用者さんの声としては上がってこないかもしれないけれど、でも、そういう風に入っているんじゃないかな。

アサダ：誰かが直接言葉にして語ることがなかったとしても、それぞれ持つ時間があることは大事ですね。

あと、スタッフさんとの交流の中で、「楽らくのテーマソングを作って!」って言われました。僕は、今すでにあるものでどうコミュニケーションが作れるかに関心があるタイプで。だから、素直に曲作るっていうことが、かえっていいのかどうか。周りから見たら、いや、音楽やってんだったら曲作ったらって言われるけど、自分ではもうわからなくなって。職員さんがその一言を言った時、めちゃくちゃだなんて思ったんですね。でも、できるな、とも思った。色々言葉をもらっているから、歌詞も書けそうだと。そういう意味では、現場と職員さん、利用者さん、みんなとコラボレーションして創作していると思います。

2曲作った歌詞にも、皆さんの活動が影響してる部分が結構あります。わかりやすいのと言うと、「Love letter to… わたしの記憶のたからもの」が歌詞に入ってますね。「楽らく日和」という曲に「わたしの記憶のたからもの抱えて」という歌詞があるんです。ほかに、直接的・間接的問わず、色々なことを思い描きながら書いてます。日常の感覚みたいなものが、空気感を壊さずそのまま白神さんの舞台の中で現れたりとか、吉田さんの写真展の中で現れたりしている中で、それを受け取っている自分の感覚にいろいろ入り込んでるなって思います。

白神ももこ

楽らくの環境をそのまま舞台の上に引っ越しする

白神：私は結構長く滞在した方だと思います。いつも刺激がいっぱいだけど何も思いつかない、ただ行っただけみたいな期間が結構あって。取っ掛かりとして、吉田さんとアサダさんのクリエーションの様子をずっと見て、どうにかして情報を得ようとしていました。吉田さんが教えてくださった「風の人、土の人」(comeyaで発行された聞き書きの本)。あの本がすごく印象的で。そうか、私は風の人でここに存在するんだって、腑に落ちて。「どこ吹く風のあなた、ここに吹く風のまにまに」というタイトルにしたのも、それがきっかけです。作品の参考にさせていただきました。利用者さんの好きな歌をリサーチしていく中で、特技を披露してその人のエピソードを引き出す、という形に落ち着いていきました。ファシリテートは職員さんの方がはるかに上手なので、すること

がないと思って、うろうろ見てるだけの時間がずっとあって。皆さん歌うし踊るし、楽しく自体がショーというか。介護士さんたちも、始まったらもう全部オンになって、いろんな気配りから、なにからなにまで。すごくパフォーマンスなんです。緩やかだけど、ずっとミュージカルを見るみたいな感覚でした。

あの感覚、あの環境を、どうにか公演に持っていかれたらと思いました。稽古して同じことができるようになるのは、結構難しい。だけど、毎日同じことをやってずっとライブというのは、楽らくの日常がそうであることに気づいて。でも、本当は、私自身はあれしかやり方がなかったと思ってます。

あと、利用者さんはみんな炭鉱節を踊れるんですけど、私たちが将来デイサービスに入った時、みんなで歌って踊れるものはないのかもしれない、と最近思っています。流行ってるものも、好きな音楽も違うから、どうなるんだろうって。でもそこで、小学生がアサダさんの歌を歌ったり、地域の人がその歌を歌ったりしていけば、そのまま伝統として残るのはと淡い期待が。その土地でできた新たな歌が培われていくと、面白いというか、救いというか。お年寄り発信から新しいものが出てきて、代々繋がってくみたいな流れも新しくて、面白いなと思いました。

和古：白神さんの舞台、うちのギャラリーに来てくださるお客さんにも見に行ってくれた方がいらっしゃるんですが、心からよかったって言ってくださって。前半は、本当に楽しくそのままみただけだけど、それでもみんなが感動するんですよ。だから白神さんってすごい人だなんて思って。あと、最後に大きい風船が出て、そこで白神さんが踊って、完全に作品化された。あそこに、詩を読むような、飛躍みたいなものがあって。その、日常からの飛躍っていうところに、ものすごい感動するし、心が洗われる。

幸平：「私はあれしかやりようがなかった」って、さっきおっしゃったじゃないですか。それがすごく、そうなんだろうなって思いました。僕らもこれしかやりようがないよね。聞き書きと、冊子なりパネルにするっていうデザインのことしか、できない。白神さんもそうなんだと思うし、アサダさんもさっきおっしゃった、「作曲すればいいじゃん」みたいなところに戻ったっていうところが、面白かったんじゃないですかね。それを見させていただいた僕たちも、すごく面白かったし。

アサダ：さっき、白神さんの話を改めて伺ってて、すごい映画的だなと思いました。日常を、劇場に引っ越しさせるわけじゃないですか。その珍道中みたいなものの映像が浮かんだんですよ。楽らくの日常、それを舞台に引っ越しさせていること自体が、すごいポエジーを持っているというか。意味わかんないですもんね、デイサービスの日常を引っ越すって。なんか不思議なことだけど、美しいなって思うし、美しさが伝わったわけですね。それはやっぱりすごいことが起きてるなと思います。

(実施：2023年5月17日、オンライン)

人たちは、福祉の現場に変化が起きてほしいとか、新しい機会が生まれてほしいという期待をしているけれど、アートによって起こる変化を、招いた人たちもまた受け入れる覚悟があるだろうか、というような問いかけがあり、とても大事な視点だと思いました。何かを招き入れるというのは、良い変化に限らず起きることでもあるし、でも、それが生きるということだったりする。苦しみが生まれることを良きこととして受け入れることは、文化ができることなのかなと思いました。



ゲストトークに出演した原爆の図丸木美術館 学芸員の岡村幸宣さん(左)、ウェブマガジン〈こここ〉編集長中田一会さん(中)、アソシエイトアーティストのアサダワタルさん(右)

デイサービス楽らくの施設長・武田奈都子からは、クロスプレイ東松山を始める際に介護の現場に対して思ったことについて語りました。

自分が施設の職員になった際に、介護って、想像力を最大限に駆使して行う仕事だと思いました。ベテランでいいケアをする介護職の方は、イメージーションもクリエイティビティもすごいです。そう思った時に、自分がやってきたアートと合うんじゃないかと、漠然と思いました。さらに、介護する人／される人、アートを教える人／教わる人ではない関係性を作ることによって、老いというものをもう一度豊かに捉え直したい、そういうことをするには場所を作るしかない、という発想でクロスプレイを始めました。

当初はアーティストがこんなに苦しむことは想定していなかったです。迎え入れて数日間で、これはえらいことを頼んでいると自覚しました。アーティストは非常に孤独な作業になるし、一方で職員側の、この人は一体何をやるんだろうという、構えた姿勢

もアーティストは感じる。ヒリヒリした空気感がある中で、時間をかけて交流することによって、どこかで福祉とアートがクロスするポイントを探っていくという毎日が繰り広げられています。



トークで司会を務めた長津結一郎さんは、クロスプレイ東松山の評価をする上で、芸術と福祉、2つの軸から考えたと述べます。

「芸術」については、アートプロジェクトとしてのアウトプットをどうするか、さきほどのアイデンティティ・クライシスの話も含めて、中堅の芸術家の育成という視点があるだろうと思います。もう一つの「福祉」的なことでは、先ほど奈都子さんがおっしゃったように、イメージーションとクリエイティビティーを使って、どういう風に老いを豊かにしていくかということがあります。でも、実際はその2つに簡単に分けられるものでもなく、現場の「ヒリヒリ感」は私も感じたことがあります。というのも、非常にどちらも挑戦的なことやってるんだろうと思ったんですね。



長津結一郎さん

自身も福祉の現場で働いた経験のあるアサダワタルさんは、アーティストという異物が入ってくることで警戒される様子は容易に想像がつくと述べた上で、そのヒリヒリが起こる必然性と、クロスプレイで何がクロスするかについて述べました。

アートの活動をやる側が持ってくる時間が、現場にとって良い余白になればと思うと同時に、余計な仕事を増やしてるんじゃないかと思う気持ちもあります。けれど、そのことをわかりながら、あえて鈍感になるしかないと思はれます。あえてくじけないというか、引っ張られずにチャレンジしていくという風に思ってきました。だから、常にヒリヒリはしてると思います。世の中のアーティスト・イン・レジデンスで、程度の差はあれ、居心地がいいものって、逆にあるのかなと思います。何かと

何かクロスする時は必ず、その「間(あわい)」の領域から、居心地の悪さは生まれるものだと思うんです。

そういう環境を考えた時に、全員が、この場でアーティストを演じられるかということを試されているように感じます。竹中香子さんが介護のエプロンをつけたという話は、あえてそちら側を演じる時間を自分の中で設けたということですね。アイデンティティは崩壊する以前に、常に人の中に複数あって。その複数あるアイデンティティを出し入れする時に、アーティストとしてのモードで行ってしまうからクライシスになるけれど、選択できるような間がそもそも設定されてるとすると、もう少し心構えは変わるのかなと思います。

じゃあ、利用者側はどうなんだろうと思うと、やはり利用者さんも家にいる時とここでは違う顔が見えたりもする。だからお互い違うアイデンティティを、隙間を縫って交換するような場、多分そこがクロスプレイの「クロス」の重要な要素なのかなと感じています。そして、そこは絶対ヒリヒリする場なのだと思います。

(実施:2024年2月11日、デイサービス楽らく)



ギターを演奏しながら「また明日も楽らくで」を歌うアサダワタルさん



参加者と一緒に「また明日も楽らくで」を歌う様子。普段楽らくで使っている歌詞を書いた模造紙を使って

クロスプレイ東松山の活動評価から見えてきたもの

長津結一郎

クロスプレイ東松山は、介護職の職員、ケアマネージャー、そして滞在アーティストという異なる専門性を持つ人々が交わる場であり、その活動を支える人々の考えや気づき、信念、さらに議論すべきポイントや改善点を探ることが、今後の活動評価や方針策定において重要な足掛かりとなる。このような観点のもと、2023年12月から2024年1月にかけて、クロスプレイ東松山に関わる人々を対象にアンケート調査が行われた。その結果の全体像は図表にまとめたが、ここから明らかになったことと、今後の検討ポイントについて以下にまとめる。

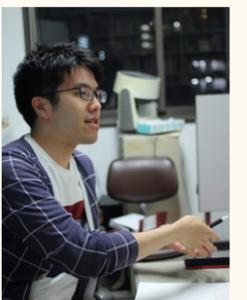
調査によれば、職員やケアマネージャーは当初、アーティストの存在に戸惑いを覚える一方で、徐々にその役割を受け入れ、介護のあり方を新たな視点から見つめ直す機会を得ている。一方で、利用者にとっては認知症等の改善だけでなく、異なる人々との交流が生活の一部となり、外部からの注目を浴びることで誇りや自信を取り戻すケースもあることが明らかになった。そして、アーティスト自身も介護現場のクリエイティビティーに魅了されながらも、職員との間に生じる温度差に戸惑いを感じる場面もあったようだ。その一方で、自らのアート観を再考する契機として活動に参加していることがうかがえた。

これらの認識を踏まえ、今後の活動において考慮すべきポイントがいくつか浮かび上がってきた。まず、アーティストが独力で「作品」を作り上げることへの種の諦めと、職員からの期待するわかりやすいアート活動とのバランスが問われる。アーティストが脱作品を志向することと、職員がわかりやすさを求めることの間には、時に葛藤が生じることもあるだろう。この点について、双方の立場を理解し合い、建設的なコミュニケーションを図ることが求められるだろう。また、利用者とのコミュニケーションにおける課題や、双方が抱える不安や疑念を解消し、円滑な交流を促すための手段が模索されるべきである。利用者はアーティ

ストの思わぬ行動に戸惑い、また、アーティスト自身も利用者への負の影響を気にすることがある。この溝を埋めるためには、お互いの立場や感情を尊重し合うことが欠かせない。さらに、職員とアーティストの間で生じる理解不足や誤解を解消し、より良いコミュニケーションを図るための仕組みや研修の必要性が示唆される。介護職の方々には変化に戸惑いを感じる場合もあり、一方でアーティストの中にも職員に迷惑をかけたくないという思いを抱く人々もいる。このような状況を打開し、良好な関係を築くためには、お互いの立場や視点を理解するための対話の場が重要である。

クロスプレイ東松山の活動評価から見えてきたこれらのポイントを踏まえ、今後はより包括的な支援体制の構築や、異なる専門性を持つ人々が協力し合うための場づくりをどのようにしていくのかという点の検討が求められる。相互理解と協力の促進に向けた取り組みが、より良い環境の実現につながるだろう。またこうした現状を踏まえた上での活動目標の設定や、関係者へのアドボカシーも今後取り組まれることが期待される。

長津結一郎(ながつ・ゆういちろう)
九州大学大学院芸術工学研究院准教授。多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走/伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なっているほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにも関わる。著書に『舞台の上の障害者:境界から生まれる表現』(九州大学出版会、2018年)、『アートマネジメントと社会包摂』(水曜社、2021年)など。

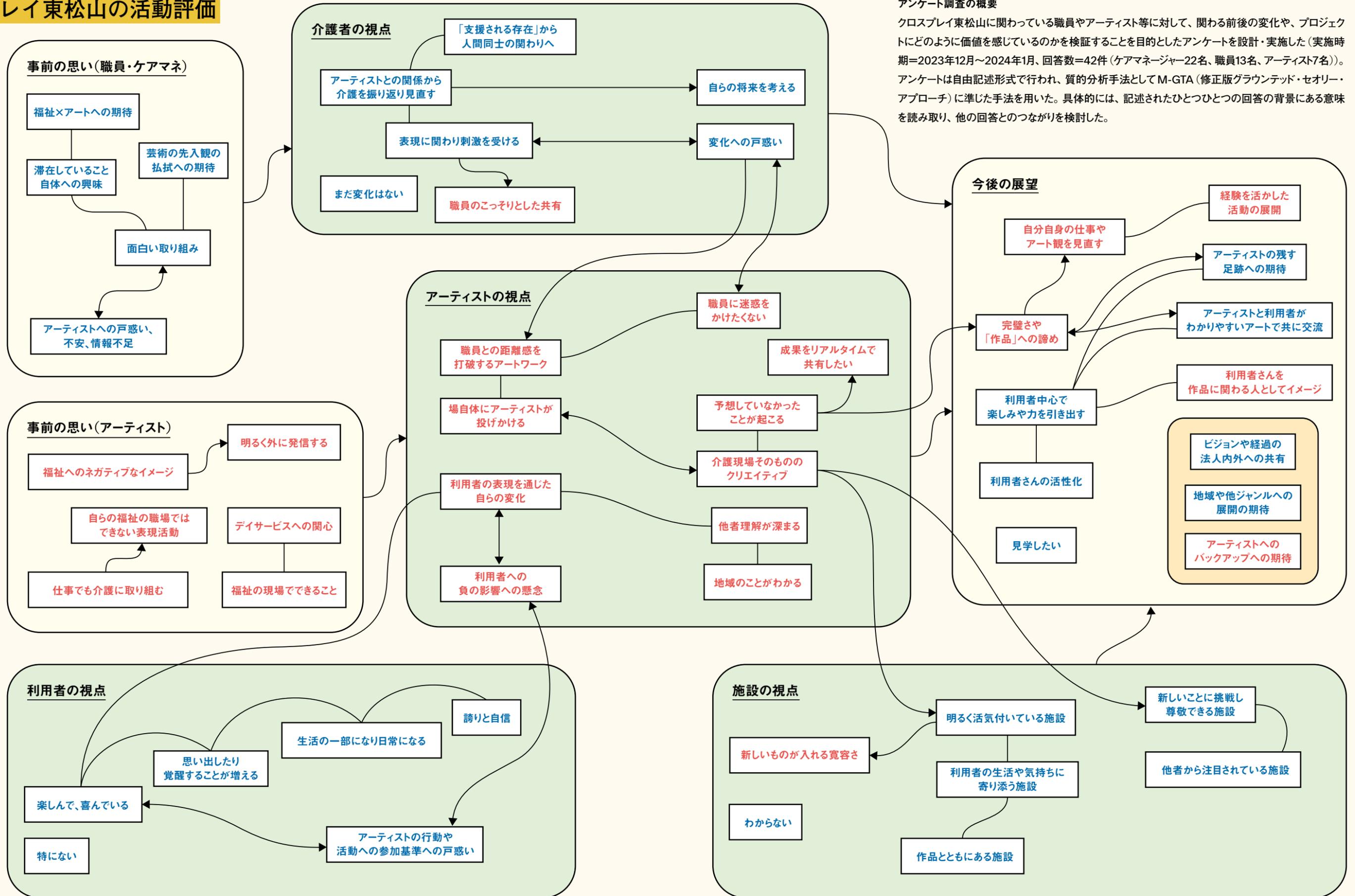


クロスプレイ東松山の活動評価

クロスプレイ東松山に関わる人々の変化
 職員とアーティストへのアンケートから

図：長津結一郎

赤字…アーティストからの回答
 青字…職員およびケアマネージャーからの回答



アンケート調査の概要
 クロスプレイ東松山に関わっている職員やアーティスト等に対して、関わる前後の変化や、プロジェクトにどのように価値を感じているのかを検証することを目的としたアンケートを設計・実施した(実施時期=2023年12月~2024年1月、回答数=42件(ケアマネージャー22名、職員13名、アーティスト7名))。アンケートは自由記述形式で行われ、質的分析手法としてM-GTA(修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ)に準じた手法を用いた。具体的には、記述されたひとつひとつの回答の背景にある意味を読み取り、他の回答とのつながりを検討した。

デイサービス楽しく職員座談

「介護の現場にアーティストが入ること」

利用者と一番近くで接している職員にとって、クロスプレイ東松山の活動はどんなものだったのか。4名の職員との座談会を設け、アーティストとの関わり方や利用者の反応などについて話してもらいました。(聞き手:岩中可南子)

普段のお仕事について

まず、皆さんはデイサービス楽しくで普段どういうお仕事をされているのか教えてください。

鈴木:介護士として働いています。送迎にも出ますが、主にホールでの活動を中心に利用者さんと関わって、一日の流れを見守る感じです。レクリエーションや体操をやったり、年間行事など担当させていただいています。ここで働いて3年位、この中では一番日が浅いです。

山木:私は相談員というお仕事をさせてもらっています。主に見学を希望する方や、現利用者さんのケアマネージャーさんやご家族とのやり取りが中心です。ここで働いて9年目です。

金井:主に入浴を担当しています。あと、何かが始まる時に

「なんとかやってみましょう」と言うのが私の仕事です。開所してからいるので、18年目ですね。

本田:私は鈴木さんとホールの担当をしています。イベントやレクリエーションも一緒に考えてやっています。働いてから17年位で、金井さんとほぼ一緒ですね。

アーティストを受け入れるとは、どういうことか

印象的だったアーティストの活動や、アーティストと利用者さんとのやりとりに関するエピソードがあれば教えてください。

鈴木:一番はじめに来てくれた白神さんが利用者さんと踊ったのは、すごく印象的でした。

山木:私たちが日々関わる中では見られない表情を、利用者さ



左から、介護職員の金井静子さん、本田美恵子さん、鈴木政美さん、相談員の山木麻紀子さん

んがされる場面があって。もう、お顔つきが変わるんですね。すごい生き生きしているというか、自分にライトが当たってる時の輝ける瞬間みたいなものが、明らかにこの取り組みであったと思います。それを引き出す力を、アーティストさんはお持ちなのかと思っています。

金井:アサダさんに関しては、別に自慢するわけじゃないんですけど、「歌を作ってください」って言ったのは私なんです。本当になんでかわからないんですけど、天から降りてきたんです(笑)。そしたらもう帰りの送迎の時にはアサダさんが歌を作っていて、驚きました。感動したのは、利用者さんがその歌をほとんど覚えて、演歌調に歌っている方がいたり、今でも歌われていることはすごいなって思います。

本田:2曲作ってくださったので、私は皆さんにはなんとしても覚えてもらわないと思って、最初の頃は頑張りました。まずは、教えられるように自分で覚えて、毎日夕方皆さんに歌っていただいて、少しずつ覚えるようになって、それが今では日課となって続いています。歌詞もすごいですよね、日常生活が描かれていて、思いも込められていて。

金井:私たちにはないものを持っている、まさにアーティストですね。これから先もそういう人たちがたくさん出てくるのがいいんだろうなと思ってます。これからの年代の人たちは、多分そういうものを求めているんだろうと思います。

山木:他の施設でやっていない取り組みをしているということで、お問い合わせもずいぶんいただいています。

金井:白神さんの舞台を観に来ていた方にも、帰りに声をかけられて、何年後かにここに通いたいって言われました。

山木:同じことだけやっていたら運営的にもなかなかやっていけない、というのはわかっているんです。利用者さんが来てくれないと、成り立たない仕事なので。今日いらした方もNHKの放映を見て、ご家族がここしかないってお決めになったそうです。吉田さんの写真展に足を運んでくれたケアマネージャーさんもあり、インパクトは強いと思います。

鈴木:吉田さんも、聞き出し方がすごかったですね。昔の結婚式のこととか、私たちが知らないことを写真を通して利用者さんから引き出してきて。展示にもご家族の方が見に来られて、そこでまた話題ができたりして。

山木:認知機能が低下してる方も、長期記憶というか、昔のことはすごく鮮明に覚えていらっしゃる方が多いんです。これも素晴らしい取り組みでしたね。

公募アーティストの活動で印象的だったものはありますか？

山木:仁禮さんの朗読の口調。利用者さんから聞いたエピソードをお話にして、ポツポツって語り出すんですが、すごい惹きつ

ける力があって、また聞きたくなっちゃうんです。

普段は写真を撮っている方で、もともと朗読をされる方ではないんですね。

山木:そうなんですか!違うんですか? でも、すごく特徴がある朗読をされていて、面白かったですね。

他のアーティストでも、もともと考えていたことから違うものになっていったとか、普段やっていることと違うことに挑戦した、という人は多いみたいですね。悩んでる様子も垣間見れましたか?

本田:何かを最後に残さなくてはいけない、ということだと思いますが、大変だろうなって外から見てて思うことはありましたね。着地点を見つけれたらいいけど。

山木:しかも、期間があるので、その間にやらなくちゃいけないのは大変だと思いますよ。

鈴木:その方向性が変わっていったというエピソード、私は聞いてみたいですね。もともと何を狙ってどういうことをやりたかったのか、でも結局こういう路線になっちゃいました、とか。

本田:あと数日しかないのにどうするんだろう、大丈夫かなって心配したこともありましたね。親心というか。余計なお世話かもしれないけど。

山木:付き合いが長くなってくると、コミュニケーションができるようになって、これからもっとお話できるかなと思うと、終わっちゃう。だから、滞在してみてどうだったか、改めてお話を聞く機会があったらよかったですね。

アーティストと職員、視点や関わり方の違いとは

クロスプレイ東松山の活動を通じて、利用者の方の日常に何か変化を感じましたか? また、ご自身のスタッフとしての心境や考えに変化があれば、教えてください。

鈴木:マイナス面では、アーティストが利用者さんのプライベートなことをインタビューしたことがあって、それがテレビで放送されちゃったらどうしようという、利用者さんの不安な言葉を聞いたことがあります。心配なことが頭はずっと残っちゃっているように感じたことはありますね。

山木:利用者さんは認知機能が低下してるといっても、自分のお気持ちはちゃんと持ってらっしゃいます。断ったら悪いとか、思いはかることができるんです。だから表向きは受け入れてくれても、本心は別にあったり、お願いされたから断れないけどなんか嫌だなと思っているとか。そこはすごくデリケートな部分なので、慎重にやっていかなきゃいけないですね。

利用者さんの活動への関わり方にも、格差が出ちゃうことはあ

りますね。関わりが多かった方はすごく輝いてたし、そうではない方もいたり。やってみないと何が起るかわからないし、トライすること自体はいいと思ってるんです。ただ、そこまでの準備だとか、利用者さんの気持ちとか、どこまで汲み取れるかが課題かなと思います。

金井:私たちは転倒しないように、怪我のないように、日々の仕事をしてるんです。何事もなく終わったお風呂の時、本当にありがたいと思うんです。今日も1日、事故もなく終わったって。何を一番とするかは、アーティストさんとは違うと思うんですよね。

山木:スタッフはそういうことを、そこまで大変そうにやっていないと思うんです。それを自然にやってるから、アーティストさんからはそんなに大変じゃないって映るかもしれないですね。

あと、アーティストさんしか持っていない利用者さんの情報が意外とあつたりします。それは一対一で時間をかけて関われるからかもしれないですけど、利用者さんもまた私たちとは違う目線で話すから。そういうところで、新たな発見が実際にあつたりしますね。

本田:朝来て帰るまでに、私たちはまんべんなく全員に声をかけるように心がけてます。だから、そんなに一人に対して長い時間は取れないんです。

鈴木:見る角度が違って、視点が違って、結局関わり方が違ってることですね。私たちは健康状態を常に気にしながら、というのが基本ですね。

アーティストと職員がタッグを組むために

これからまた新しいアーティストが滞在する予定ですが、今後のクロスプレイ東松山の活動に期待したいことや要望があれば教えてください。

本田:関わるにあたっては、アーティストさんと綿密に話をしながらやっていきたいなと思っています。

金井:本田さんとも話したことがあります。タイムスケジュールを細かく作っていただければ、職員も協力できるかなと思います。何時からこれをやって、この時に職員に協力してほしいみたいなものがあつたら良かったなって。

鈴木:そう、入ったらいけないのか、任せ方がいいのか、その辺の対応にも悩みました。私たちが出ちゃうと、アーティストさんのものではなくなっちゃうのかなと思ったり。

金井:私たちは、お手伝いすることは得意なんですよ!だからここ手伝ってくださいって言ったら、100%お手伝いはできると思うんです。

本田:そういうふうに協力体制を組めるといいですよ。利用者さんも、いつもと違った刺激を受けられるんじゃないかと思

います。

山木:具体的なお話がちゃんとできて、私たちがイメージができたなら、アーティストさんと私たちでうまくタッグを組めると思います。利用者さんの日常を知ってるのはやっぱり私たちですから。この方はこういうふうに言ってるけど、こういうお気持ちもある方なんですとか、言えると思います。

金井:アーティストさんたちがこの先がたくさんいらっしゃる中で、施設の職員が大事にしていることを把握してもらった上で、何がしたいと言っていたら、また違うと思います。みんなできないことができるのがアーティストさんたちなので、これから先はそういう人たちが求められると思います。本物の思考みたいなものが要求される時代が来ると思うんです。

山木:1日1回でいいから、利用者さんに笑って帰ってもらうのが、この仕事での私のモットーです。いつも利用者さんの輝く表情が見られたらと思っています。1日の中で本当にわずかな時間でもいい、滞在期間中に1回でもいいと思うんです。そういう瞬間が生まれるって普段はないですから。専門性を生かしていただいて、何か利用者さんの心に響くようなものが生まれるんだつたら、それに対して私たちは協力したいです。アーティストさんとは、基本的には同じ方向を向いていると思うんですよね。だから、一緒にいいものができるんじゃないかって。そういうものがここで生まれたら、素晴らしいなって思います。



デイサービス楽らく玄関で出迎える、職員手作りのかかし「ヨネ子」

[対談参加職員]

山木麻紀子

金井静子

本田美恵子

鈴木政美

事務局振り返り

「ケアとアートがクロスする場で何が起きたのか」

日々議論が絶えない3人は、それぞれどのような視点を持って運営に携わっているのか。活動のプロセスや成果の記録と合わせて、現場を生み出す運営側の視点を残していくことも同じくらい重要であると考え、改めて3人で話しました。(聞き手:岩中可南子)

3人の役割とプロジェクトへの関わり方について

まずは、皆さんの出自とクロスプレイ東松山での役割を教えてください。

武田奈都子:もともと自分はパフォーマンスアーツのアートマネージャーから出発しています。その後、10年ほど前に家業である保順会の仕事に就きました。アートが医療や介護の現場に入ると豊かになるんじゃないかという漠然としたイメージがあつたので、ここでちゃんと実践してみようかなって。単発でワークショップをしいてたんですけど、1日1回だけだと先生が来て楽しい事やっておしまい、みたいな感じになって。日々の中にアーティストがいて継続的に関わることで何か違った視点が見えるんじゃないか、それは介護職にとっても刺激になるんじゃないかと思っていたところ、デイサービスが移転することになり、それを機にアーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)の場所を作ろうと。それで、やるなら私が施設長にならないと職員を説得するのが難しいと思い、2022年6月、クロスプレイが始まるタイミングで施設長になりました。今は、施設長の仕事を日々やりながら、アーティストの受け入れもやっています。

藤原顕太:自分のキャリアとしては、福祉系の大学を出た後、東京で舞台芸術に関する仕事に10年ほど携わりました。その中で舞台制作の仕事とソーシャルワーカーの仕事に親和性を感じるようになります。ちょうど滋賀県の社会福祉法人で障害のある人の文化芸術支援に関する仕事があつたので、そこで4年間働きました。楽らくを移転新築し、AIRを始めたいという構想は武田知也さんを通じて武田奈都子さんからも聞いていたのですが、具体的には、2020年秋頃に知也さんから、アートマネージャーがメンバーとなる新しい法人を立ち上げたいこと、その新しい法人で保順会と合同でAIRを手掛けたいので関わらないかという話がありました。考えた末に新法人(bench)の立ち上げに参加して、クロスプレイの事業を一から作っていきました。

現在は、アーティストのコーディネートや職員との調整、助成金申請など、いわゆる制作まわり全般を担当しています。

デイサービス楽らくの職員ではないけれど、週に何回か楽らくに行っ

てプロジェクトの仕事をするという関わり方は、楽らくの現場には今までなかった立ち位置でした。だから職員にとっては、何をやってるのかわからない人という認識だったのではないかと思います。1年コーディネートとして入った中で、デイサービスの業務の流れとクロスプレイの活動が噛み合っていないと難しいと感じたため、2年目からは朝の送迎業務にも関わるようにしています。

武田知也:benchとクロスプレイの立ち上げはほぼ同じ時期で、どちらが先かは今では曖昧です。私自身、パフォーマンスアーツの作品をプロデュースする時に、舞台芸術を生業としていない人たちや別分野と協働する中で作品を作っていくことに意義を感じるようになっていました。それから、「老いと演劇」OiBokkeShiの菅原直樹さんと2018年から協働するようになり、高齢者と芸術の関わりへの興味関心も深めていきました。そういうことが重なっていく中で、クロスプレイを立ち上げることになりました。

私は3人のミーティングで、プロジェクトの方向性やスキームなど、全体を見ながら様々な側面から意見を交わすのが、一番の仕事になっているかなと思います。具体的などころでは、アソシエイトと公募アーティストの選考に関わり、アソシエイトアーティストとは、プロジェクトの立ち上げや方向性について随時意見を交わしています。

ただ「居る」とはどういうことか

アーティストのアンケートを読んでいて、企画していたことが全然通用しないとか、一から考え直すことになったとか、苦しんでいる様子も伺えました。クロスプレイの公募アーティストには作品発表がマストで位置づけられていませんが、アーティストが施設に「居る」ことにどのような可能性があると思いますか?

藤原顕太:目的は「居る」ことではなくて、交流なんだと思います。クロスプレイでは、地域の文化施設・福祉施設・教育施設などが小さなアートセンター的な機能を担い、お互いが連携することで、地域内で文化交流を通じた住民同士のエンパワメントが生まれることをビジョンとしています。特定のジャンルとかの意味ではない、文化的な生活ができる地域が達成することを理念として謳ってい



左から:藤原顕太、武田奈都子、武田知也

ました。そのような環境ができるためには、アーティストが滞在して周囲の人たちとの交流を作っていくことこそが重要ではないかと考えています。

その上で、作品を通じて表現したいという欲求がアーティストに生まれた時、表現できる余地があるレジデンスプログラムであることが大事だし、その活動に伴走していく自分たちのような存在も必要だと思っています。

武田奈都子: こういう作品を作りたいのでレジデンスします、という構造にすると、道順が決まってしまう。作品を前提にすると、そこに合わせようとする力が働いてしまうんですね。クロスプレイは、自然に欲求が生まれてくるような空気感があるのが他のレジデントとは違いますよね、みたいな話をアーティストの方もされています。その中で、創作方法もこれまでとは違うものになったり、新たな考え方や作品に対する欲求が生まれていく。それはクロスプレイでやっていただきたいことでもあるんですね。

武田知也: 公募アーティストには特に作品制作をお願いしていないのに対して、アソシエイトアーティストには最終的に何かしらのアウトプットを依頼しているのは、大きな違いだと思います。公募アーティストには環境を提供していて、それをどう活用するかはその人次第です。一方で、アソシエイトアーティストはそうではなくて、アサダさんの今年度のプロジェクト全体も「作品」と捉えられると思いますが、ある時点から「作品化」へ向かっていくことで起きる摩擦や零れ落ちるもの／産まれるものについての意味は、今後も考えていきたいことです。

「今、ここ」に向き合うこと

滞在するアーティストの中には、ダンスや演劇などパフォーマンス系のアーティストが多い印象もありますが、そうした身体表現とデイサービスでのAIRは相性が良いと思いますか？ またそうだとしたら、どのような要素がそう感じさせるのでしょうか。
武田知也: 舞台芸術にとって「今、ここ」「現在」をどう捉えるかはすごく大事なことです。時間・空間を再構成して、観客やそ

の場にいる人たちと同時代性を共有することに全力を注ぎます。例えば菅原直樹さんは、認知症の人と接する際に、演技を使ったり、認知症の人の状況を演劇の虚構性と重ねることで、そもそも私たちの日常が誰にとっても不確かで不安定な現実であることに気づかせ、それを共に楽しむことを提唱しています。

武田奈都子: 認知症のある人は「今、ここ」を生きている人なんですよ。昔の記憶はあるけれど、ちょっと前のことは忘れてしまうとか。白神さんの舞台に前日依頼されて出演された方も、翌日は出演した事がうろ覚えなんです。記憶が薄れていってしまうこととか、わからなくなってしまうことは、ご本人としては混乱することだし、混乱した人を見て家族や周りの人が混乱することもあるんですけど。「あなたの今の表現そのものが、あなたですよ」って、目の前にいる人を受容するための発想とか非言語的な関わり方は、パフォーマンスアートと通じるところがあるのかなと思います。

武田知也: 高齢者の身体にはいろんなものが蓄積されていて、その身体から見えてくるものは個人的なことだけでなく、地域のコミュニティのことでもあるかもしれないし、もっと広げれば社会全体、人類全体のことかもしれない。さっきパフォーマンスアートは同時代性があると言いましたが、高齢者って歴史を持つ存在でもあるので、過去と現在、或いは未来との接合点になれる存在なんじゃないかと感じることもありますね。

藤原顕太: 私自身は、パフォーマンスアートが他のジャンルと比べて特別に向いているとは必ずしも言い切れないんじゃないかと思っています。滞在アーティストの中には、滞在中に見つけたことと、自分の持っている表現手段がマッチせず苦労した人もいます。例えば、美術のアーティストである仁禮洋志さんが滞在中に朗読という手法を選んだように、そのアーティスト自身が持っている表現方法を一旦手放していくこともあり、そういったことがアイデンティティクライシスにも繋がってるんだと思います。むしろ滞在中が終わった後でアーティストが専門とする表現分野に戻った時、どのような表現が生まれてくるのが重要だと思っています。

何が、どのように「クロス」するのか

クロスプレイ東松山の「クロス」には、アートと福祉が交わるという意味が込められていると思うのですが、アサダさんが先日のトーク(p.28-29)で、関わっている一人一人の中に複数のアイデンティティがあり、お互いの違うアイデンティティをクロスする場がクロスプレイだとおっしゃっていたのが印象的でした。みなさんは、楽しくアーティストが滞在することで、何がクロスしたのか、またはどのようにクロスが起こったのかと思いますか？

藤原顕太: 後から振り返ってみて、それぞれの滞在中のターニングポイントは大体どのアーティストにもあって、何か接点みたいなものが見つかったり、手掛かりが得られたりする瞬間がクロスするポイントかと思っています。

武田奈都子: 利用者さんや職員側から見た場合の話になりますが、吉田夫妻が聞き書きの写真展をやった時に、普段自分のことを語らない人が大事な写真を持ってきて、自分のことを語り出す瞬間があったんです。みなさん誇りを持って過去の話をしていました。あと、写真展って地域の方も気軽に来れる企画だったので、ある利用者さんの人生の1ページから、この地域の歴史の話が出て、文化や暮らしの話を聞く機会がありました。それは普段のデイサービスではできないことだったなと思いました。

武田知也: それを聞いて思うのは、デイサービスって利用者さんにとっては、ケアをされる場じゃないですか。だけど、人間の関係性って本来は双方向に変容していくものなので、ケアをする／される側という方向も入れ替わるはずなんですよ。クロスプレイでは、そういうことに気づきやすくなって、ケアする／される場という福祉施設の基本的なあり方に転換が起こる。そのことが職員含めて実感する機会になっているんじゃないかなと思います。

評価を受けての今後の展開

今回の長津さんの評価を受けて (p.30-32)、変えていきたいと思うことはありましたか？ これまでの活動を振り返ってみて、今後の活動に抱いている展望があれば教えてください。

武田奈都子: 今は楽しく利用している人とアーティストの交流がメインになっていますが、地域に広がるためにはどうしたらいいかを考えていきたいです。アサダさんとの活動で小学校との関係ができましたが、もう少しアーティストが外との接点を増やせたらいいなと思います。あとは、アートとケアに興味のある地域住民と協働することもやってみたいです。最終的には、子どもやアーティストや高齢者が日常的に交流するアートセンターにしていきたい。これは大きな夢なんですけれど、そういう場所が地域にできたらいいなと思っています。

藤原顕太: 今回は主にアンケートを元にした評価でしたが、アンケートには書かれないエピソードが現場では毎日生まれていて、それらのエピソードからクロスプレイ東松山にとっての本質的なものを拾えるようにしたいと思います。また、プロジェクトを通じて、福祉の中にある文化的な価値観を更新していきたいのですが、そのためには、ソーシャルワーカー的な視点を持ってプロジェクトを進めないとだめなと思っています。それはアーティストへの伴走ということだけではなくて、むしろ複数の主体の間で、中立的な立ち位置で社会資源同士を結びつけていき、お互いにとって理のある形を作るという発想です。そういった職能が出てくることは、この先アートと福祉を繋ぐ上ではとても重要になってくるのではと予感しています。

武田知也: 僕は、このクロスプレイで起きているアーティストの視点、或いはやりたいという欲求をどのように伸ばしていけるかを考えています。アーティストにとって、ここでの体験がどのように影響したかを追っていったり、改めて問題意識を提起したりする場合は、作品発表含めてぜひ作りたい。ケアの現場で起きていることは、3人がここで話したことに限らず、人間や社会が考えるべき「問い」がもっとあるはずで、クロスプレイを通じて広く考える機会にできればと。それがアーティストが関わる力だし、アウトプットを通じてパブリックに開かれる意義も引き続き考えていきたいですね。

武田奈都子: 今日3人で話してみても改めて思いましたが、三者三様、見てる視座が違うところでは確かにあって。凄く大変ですけど、クロスプレイのメンバーが丁寧に関係性を作っていくことと、関わってくださる方との丁寧なやりとりが、この企画には本当に重要なんだなと思いました。

(取材:2024年3月6日、オンライン)

武田奈都子 | 1978年山梨県生まれ埼玉県育ち。社会福祉士。(医)保順会常務理事。デイサービス楽らく施設長。幼少期よりクラシックバレエを始め、玉川大学芸術学部、英国ラバンセンターにて舞踊を学ぶ。大学卒業後、パフォーマンスシアター水と油制作、フリーランスのアートマネージャー、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局を経て、2012年(医)保順会の理事就任。2022年よりデイサービス楽らく施設長に就任し、「クロスプレイ東松山」を通して、福祉とアートが交わる場の創出・実践に取り組んでいる。

藤原顕太 | 1980年神奈川県生まれ。舞台芸術制作者、社会福祉士。舞台制作の支援業務に携わった後、2017年から福祉と舞台芸術に関わる活動を始める。2021年、一般社団法人ベンチに参加。高齢者福祉施設でのアーティスト・イン・レジデンス「クロスプレイ東松山」、アクセシビリティ・コーディネイト、障害がある人の芸術文化活動支援、アートマネージャーの相談支援・人材育成等の事業に携わる。NPO法人Explat副理事長。

武田知也 | 1983年横浜市生まれ。舞台芸術プロデューサー。にしがも創造舎、フェスティバル/トーキョー、ロームシアター京都などでの事業・企画担当を経て、2021年アートマネージャーのコレクティブとして一般社団法人ベンチを設立、代表理事を務める。舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)副理事長。埼玉県川越市にてまちづくり・場づくりを手掛ける合同会社オンドメンバー。



クロスプレイ東松山 実施体制（2022・23年度）

参加アーティスト（滞在初日順）

アンシエイトアーティスト：白神ももこ、アサダワタル、吉田幸平・和古

公募アーティスト：松橋和也、安村卓士、桂融、仁禮洋志、浅川奏瑛、竹中香子、青木麦生、野村真人、荻原雄太

プロジェクトパートナー：デイサービス楽らく利用者／職員

写真：吉田尚平

宣伝美術・ロゴデザイン：ヤング荘

インターン（2023年度）：唐澤依緒里、富樫知美

企画・プロデュース・コーディネート：武田奈都子（医療法人社団保順会）、藤原顕太（一般社団法人ベンチ）、武田知也（一般社団法人ベンチ）

主催：医療法人社団 保順会、一般社団法人 ベンチ

助成：公益財団法人 福武財団「アートによる地域振興助成」（2022・23年度）

公益財団法人 全国税理士共栄会文化財団（2022年度）

公益財団法人 日本フィランソピック財団「未来の介護基金」（2023年度）

埼玉県文化振興基金助成事業

後援：東松山市（2023年度）、東松山市教育委員会（2023年度）

協力：東松山市市民文化センター（公益財団法人公益財団法人東松山文化まちづくり公社）、東松山市立唐子小学校、comeya gallery、株式会社 独楽蔵、岡村幸宣、長津結一郎、中田一会

クロスプレイ東松山 報告書 2022 / 2023（完全版）

ケアとアートが交差する場で起きていること

編集：岩中可南子

執筆：武田奈都子、藤原顕太、武田知也、岩中可南子、長津結一郎

写真：吉田尚平、森勇馬、加藤甫、独楽蔵

デザイン：北風総貴（ヤング荘）

発行：医療法人社団保順会

埼玉県東松山市大字新郷29-3

TEL. 0493-23-9045

一般社団法人ベンチ

埼玉県川越市宮下町2-17-4

TEL. 050-5369-5637



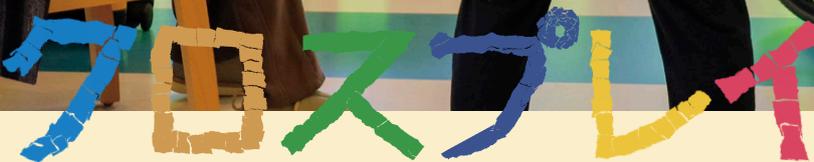
公益財団法人 福武財団



2025年1月24日発行

©Medical Corporation Hojunkai & bench.Co All Rights Reserved. 無断転載複製禁止





H I G A S H I M A T S U Y A M A